八尾市文化財調査報告７

昭和53・54年度
埋蔵文化財発掘調査年報

1981 3

八尾市教育委員会

はじめに

昭和５３、５４年度における埋蔵文化財緊急調査のうち、いささかでも学術に貢献し得ると思われるものについて調査概要を年報として集録いたしました。これらのうち「中田遺跡、刑部地区」出土の古式土師器の一括土器群は、古代河内国を考える上で極めて貴重な資料となるものであります。ご利用いただければ幸甚に存じます。

ご承知のごとく八尾市におきましても開発、建築等による埋蔵文化財の消滅は年ごとに増加し、これに対する保護、保存については苦慮いたしておるところであります。

今後とも文化財保護行政に鋭意力を注いで参りたいと考えておりますが各位におかれましても一層のご指導、ご協力をお願い申し上げる次第であります。

昭和５６年３月

八尾市教育委員会

教育長　坂本正一

●調 査 目 次

Ⓐ 工 事 種 別　　Ⓑ 調 査 年 月
Ⓑ 調 査 面 積　　Ⓓ 遺物による時代

1. 亀 井 遺 跡 …… 1
Ⓐ 八尾市立亀井小学校建設
Ⓑ 昭和５３年４月
Ⓒ １７５㎡
Ⓓ 古 墳 時 代

2. 亀 井 遺 跡 ……原田 昌則…… 4
Ⓐ 工 場 建 設
Ⓑ 昭和５４年１月
Ⓒ １２５㎡
Ⓓ 古墳時代～室町時代

3. 中田遺跡ほか …… 22
Ⓐ 日本電信電話公社、地中線埋設
Ⓑ 昭和５４年１１月
Ⓒ １２０㎡
Ⓓ 弥生時代～室町時代

4. 小 阪 合 遺 跡 …… 25
Ⓐ 関西電力㈱、地中線埋設
Ⓑ 昭和５４年１２月
Ⓒ １８０㎡
Ⓓ 古墳時代～鎌倉時代

5. 佐 堂 遺 跡 …… 33
Ⓐ 分譲住宅建築
Ⓑ 昭和５４年６月
Ⓒ １２５㎡

Ⓓ 古墳時代～室町時代

6. 佐 堂 遺 跡 …… 35

Ⓐ 屋内水泳場建設

Ⓑ 昭和53年7月

Ⓒ 175㎡

Ⓓ 弥生時代～鎌倉時代

7. 中田遺跡〈刑部地区〉……高木　真光…… 40

Ⓐ 関西電力㈱、地中線埋設

Ⓑ 昭和53年4月

Ⓒ 75㎡

Ⓓ 古 墳 時 代

1. 亀井遺跡

八尾市立亀井小学校
建設予定地　埋蔵文化財発掘調査概要

亀井小学校建設予定地は八尾市亀井町１丁目１～２番地内で亀井遺跡推定範囲のほぼ北東の一画に当る。亀井遺跡は昭和４３年平野川改修工事に伴って発見された遺跡で、大阪府教育委員会、大阪文化財センターによって過去６回にわたって調査されている。遺跡は八尾市亀井町２丁目付近から大阪市東住吉区長吉出戸町一帯にひろがると推定されており、その内容は弥生時代前期にはじまり古墳時代全期に至る集落跡で夥しい遺物の出土をみている。とくに中央環状線東側の地域に遺構、遺物の包含が濃密で、ここに遺跡中心を想定している著名な遺跡である。

調査は建設予定地内の校舎屋部、および体育館、プール予定地を対称に６ケ所を選び、それぞれの試掘孔に（K．R．S）A～Fの記号を付した。以下各々について調査結果を土層序にもとづいてのべる。

A……旧水田面から約８０cmの盛土をしている。旧水田耕土の厚みは２０cmで水田耕土としてはごく一般的であるが床土は６０～８０cmとかなり部厚く造成されている。さらに第７、８号層も土質からの観察では床土層とみてよく第６号層を一時期前の水田面層とすると２時期で実に１２０cm～１４０cmに及ぶ客土がなされたことがわかる。

次は第１０号層黒色粘土層に下る。この層は上部半層が次にのべる杭列遺構に伴う水田面と推察できるからA試掘孔においては少なくとも３回に亘る水田面の重なりを認めることができる。

このような水田耕作面の重なりはこの地域一帯が、かなり低湿潤地で、いわゆる湿田地帯であったことによるものであろう。客土層中に含まれる土器片の観察から、この１mの客土（地上げ）工事はほぼ鎌倉時代と推定される。第７、８号層を支えた床土層に当り、この層は古墳時代末期～奈良時代までの造成層と判断できる。この造成期における第１０号層期は或期間水溜り状の地形となっていたことを物語っている。それは孔東壁面南半部にみられる青灰色ないしは暗黒灰色粘土の堆積状況からいえることである。

ついで第１０号層の下部は５０～６０cm厚みで黒灰色粘土層帯がある。部分的に微砂（シルト）のブロックがみられるが全体に粘着度が高く層上部に薄く炭化物や自然植物遺体を含む。

次はこの層中に見られた自然木の一端を削った木杭列を伴う小溝状遺構についてみると、まず木杭列と小溝中には自然植物遺体と共に加工痕を持つ大小の木材片が不規則に埋もれていて、この杭列および溝の性格を推考する手がかりが得られる。さらにこれら木材片と共に土師器片、銅鏃の出土があってこの第１０号層と黒色粘土層、溝、木材片、そして木杭列という一連の遺構の所属時期をほぼ摑むことができる。すなわち下限を５世紀中頃とし上限を５世紀初頭とする極めて短時期間に入れることができる。

木杭を伴う小溝遺構は弥生時代以来稲作農耕地として選ばれた低湿地水田にしばしば見られる施設で、水田畦畔状農道である。水田肥ばい管理に設けられた農道は同時に水田区画の畦畔でもあったわけで軟弱な地盤に対して不要となった木片を路面に敷いた場合もあろうし小枝、雑草を敷いて歩行の便をはかった。一方この木杭列を河道に設けられた堰状遺構とする面での観察もあるが河道の痕跡は認められず、むしろ住居ないしは集落を囲む木柵、溝の可能性を考えたい。しかし試掘孔内での調査ではこれについ

ての積極的な資料は得られなかった。

第１１号層は青灰色シルト混りの粘土層となりかなりの厚みをもって下方に続くようである。この層中には遺物をはじめ自然遺体などは一切認められない。

B……旧耕土上面に約１５０cmの盛土がある。Ｂ地点では旧耕土厚み約２０cmに対し、床土層は１５cm前後と比較的うすい。床土の締りも固くなく、次の第３号層は細砂ないしは微砂で２０cm強の厚みであり、第４号層も細砂まじりの約８～１０cmとうすい。この地点は水田としては水持ちの悪い一画であったと思われる。

Ａ試掘孔第７号層に見られた青灰色シルト質粘土層はＢ試掘孔にあっては第４号層直下に相当するようで、さらにＡ孔の第１１号層青灰色シルト質粘土層はＢ孔で第９号層と合致するようである。このような層の傾きはＡ地点がＢ地点より低く湿潤地相を呈していたことのあらわれであろう。

第９号層は青灰色細砂約５０cm厚みで、この層の下半約２０cmからは湧水が著しい。この伏水を多量に含んだ砂層の次は灰色粘土層となっていて上層の水を支えている状態にうかがえる。従ってＡ孔における第２期の水田面に当る第６号層と対応するのは第５号層となり、Ａ孔の第１０号層５世紀代の杭列遺構層はＢ孔においては第８号層の緑灰色粘土層となるようである。しかしＢ孔では遺構、遺物は認められず、僅かに第１０号層の細砂層中に磨耗の著しい土師器小片が一点含まれていたに過ぎない。

C……Ａ試掘孔の南に設定した試掘孔であるが盛土約１５０cmの下は、かって水溜（沼）状の地形であったようで、出水も著しく廃棄物などが充満しており調査記録をとり得なかった。

D……Ｂ試掘孔の南地点である。盛土は約１００cm、耕土層約３０cmを測る。床土はＢ孔同様にうすく約２０cm、そしてＢ孔では充分把握できなかった第５号層の灰褐色砂質粘土層および第６号層褐色砂質粘土層を第２期の水田層、第７号層の褐色粘土層を床土としてよいようである。第９号層の細砂層はＢ孔と同様に多量の伏水を含み湧水が激しい。

E……校舎屋建築予定地の南端に当る地点で旧工場地内である。工場施設で地下はかなり深層部まで撹乱されており、さらに工業用水槽に近く漏水もあって調査が困難である。

工場用盛土約６０cm、これに約１０～１５cmの旧耕土と推定される層が続き、次に３０～４０cm厚みの床土層とみられる第３号層がある。第４号層は褐色土となって厚み約４０cmではじめて安定した層となっている。土質はＡ孔の第４、５号層に近いもので同時期の客土であろう。第６号層の褐色粘質土を、Ａ、Ｂ、Ｄ孔に見られた第２期の水田層と考えてよく、第７、８号層が床土となるようである。第９号層は青灰色シルト、そして以下は同色細砂層が約７０cmばかりの厚みで続き、湧水は他のいずれの試掘孔より激しい。さらに下層は約５０cm厚みで暗褐色粘土層となり、土中には自然植物遺体（水草ヒシ等）を多量に含んでいる。この層はＡ孔で杭列の認められた第１０号層に対応する層である。次は約３０cm厚みの青灰色シルト質粘土層、青灰色砂層と続き砂層からの湧水はかなり激しい。

F……建築とは直接関係のない地点であるが試掘孔A～Eとの関連を見るための掘削を行なった。この地点もかって水溜状の土地であったらしく盛土１００～１２０㎝ばかりの下は工場廃棄物の堆積で約１００㎝ばかり続く。現地表下約２５０㎝前後で青灰色粘土層約４０㎝、この層の下がA孔で見られた黒色粘土層となり中に自然植物遺体（水草等）若干を含む。次は暗灰色砂層となり、この砂層はかなりの厚みをもつもののようである。

関西線久宝寺駅南の八尾市春日町一帯は弥生時代前期の土器を包含する地域であり、亀井遺跡もまた弥生時代前期にはじまる宏大な遺跡である。これら２遺跡の中間にある調査地は顕著な遺構、遺物に接しなかったとはいえ、前二者の遺跡、包含地と無関係の土地ではあり得ない。いずれ当時代の農耕地として最大限の利用があったことと思われる。北の長瀬川、南の平野川の古代における実想は摑み得なかったがこの両河川の変遷とともに調査地一帯にも地形上の変化を余儀なくされたことも考えられる。それは、A試掘孔にみられた部厚い客土層、そしてその下にひろがる水溜状地層、B、D、E試掘孔底部にある細砂含水層は、これらの問題を考える将来への課題として遺されている。

2. 亀井遺跡

工場建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査

八尾市北亀井町４丁目の一帯は「亀井遺跡」の北縁と推定される地区である。また関西本線を北に隔てた地域は「久宝寺遺跡」がひろがり八尾市南西部における重要な遺跡である。この地は南から北にのびた羽曳野丘陵の舌状先端部の縁辺に当り、旧大和川の一つ長瀬川の左岸堆積部と接する。ここを東から西方向へ平野川が流れ、流路沿いは帯状の低湿地となっている。

調査地は長瀬川が安中、渋川地区（国鉄八尾駅付近）で北寄りに向きを変えている地点に堆積した三角州状の土地の一画に当る。すなわち、明治１８年製陸地測量図及び昭和４０年土地条件図によると旧安中村付近で枝状に分かれ旧植松村、旧太子堂村を経て旧亀井村で平野川に合流する流路痕（氾濫原痕跡）をのこしている。旧安中村、渋川村を頂点とするこの大形の三角州地内には飛鳥時代の創建になる渋川廃寺をはじめ式内許麻神社、跡部神社の古社、そして中世には顕証寺（久宝寺）、真観寺などがある。すなわちこの大三角状の地は少なくとも渋川廃寺の建てられた飛鳥時代前後の頃は安定した土地として集落の存在を考えることができる地域であった。資料的には鎌倉時代にはじまる真観寺もまたこの地区の一画にあり現代まで法灯の続いた古刹である。調査地はこの真観寺に北接する地点で、かつては寺域内であったかとも考えられ、調査はこの面からも極めて注意されるものであった。

調　査

調査地は南北３４ｍ、東西９８ｍの東西に長い空地で東側に市道、西側は中央環状線が南北に通っている。北は水路を隔てて水田となり、南は真観寺に接している。

調査は５ｍ×５ｍの試掘孔５ケ所を設定し盛土部は機械で、旧耕土以下は人力によって調査した。

Ａグリッド

盛土と第２層旧表土（暗褐色砂質粘土層）を除去すると包含層である第３層暗青灰色粘土層と第４層青灰色粘土層が続いていた。

以下は、最下層までシルト土層の堆積を見るだけで遺構の検出は認められなかった。

遺物は第３層、第４層で認められたが屋瓦、陶器片等が若干出土したにとどまった。

Ｂグリッド

層序は上層から第１層盛土、第２層旧表土（暗褐色砂質粘土層）と続くが無遺物土層であった。その下の第３層暗青灰色粘土層では瓦器、土師質皿、陶器等の破片を含んでいたが以下の土層は最下部まで無遺物土層の砂層が複雑に堆積していた。

遺構としては、第４層淡灰色細砂土層と第７層淡黄灰色微砂土層を肩として、東西に延びる溝状遺構が認められている。溝状遺構は幅２ｍ・深さ0.8ｍで東西方向に走り、溝内には暗灰色粘土が充填していて上層では瓦器椀、土師質皿、土釜、石釜、屋瓦等の破片が出土し下層では、植物遺体が多量に含まれてい

た。

Cグリッド

基本的には最下層まで5層を数えることができる。地表より－1.4ｍまでは盛土及び旧表土で以下第3層暗青灰色砂質土層、第4層暗灰色粘質土層、第5層青灰色砂質土層が続いている。

遺構としては、Bグリッドから連続する溝状遺構が確認されている。

遺物は第2層暗褐色砂質粘土層でも認められたが、主として第3層暗青灰色砂質土層と溝内で認められ、瓦器椀、土師質皿、土釜、屋瓦、陶器等の破片が出土している。

Dグリッド

Bグリッド同様3層以下は最下層まで不規則な堆積となっている。

遺構は、第3層暗青灰色粘土層上面において直径1ｍ・深さ5㎝の楕円形の落込みを検出しただけで、以下の下層でも遺構の検出は認められなかった。

遺物は第2層暗褐色砂質粘土層でも確認されたが、中世遺物を主体とした包含層はグリッド東側の茶灰色粘土層で完形の瓦器椀、瓦器小皿、土師質皿等が出土した。また、グリッド西側一帯をしめていた淡灰色砂質土層からは、中世遺物の出土はなく古墳時代前中期の遺物が出土した。

Eグリッド

層序は第1層盛土、第2層旧表土（暗褐色砂質粘土層）、第3層暗青灰色砂質土層、第4層灰色砂質土層、第5層灰色中砂土層、第6層灰色粘土層、第7層暗灰色粘土層となっている。

遺構としては、グリッド南東の隅で2基の井戸が検出された。北側の1基は土釜井戸で土釜の底部を打ち抜き井筒としたもので口縁径30㎝・器高２８㎝をはかるものである。井戸の掘方は東西1.3ｍ南北0.９５ｍで楕円形を呈していて、すくなくとも第4層灰色砂質土層からの切り込だと推定され、下の第5層灰色中砂土層の包水層に達するものである。現状では、井筒は1段のみの検出であるが、井戸上面で上釜片が数点出土したことなどから井筒は2段以上あったものと思われる。

一方南側の井戸は、直径６０㎝・深さ３０㎝をはかる円形の素掘り井戸である。内部は2層から構成されていて上層は黄灰色中砂土層、下層は暗灰色粘土層で最下部は第6層の灰色粘土層に達している。また、下層の暗灰色粘土層からは中世遺物の細片が数多く出土している。この様な2基の井戸の検出状態から、南側の素掘り井戸の廃棄後に北側の土釜井戸を構築したものと推定される。

遺物は、井戸内を別にすると大半が井戸上層の淡灰褐色粘砂土層を中心として出土し瓦器椀、瓦器皿、土師質皿等の破片が認められている。

遺構小結

確認した遺構は、Bグリッド、Cグリッドの中央を東西に走る溝状遺構で両グリッドとも砂質土層を肩とした切りこみで、溝内の堆積土は、中世遺物及び植物遺体を多量に含む灰色粘土層であった。同様の堆積状態はDトレンチでも認められ、第3層下層で中世遺物及び植物遺体を含む灰色粘土層と砂質土層が検出された。灰色粘土層では時期差のある瓦器椀が出土し、砂質土層からは布留式の土器が

出土している。またB、Cのグリッドで溝の肩となった砂質土層はAグリッド付近ではまったく認められないところから、布留式の土器片を含む砂質土層の広がりは、Aグリッド付近を東限とし南北に広がりを持つものと考えられる。一方Eグリッドで認められた2基の井戸は今回の調査における唯一の遺構であった。井戸面の示す中世の遺構から下層では生活面と考えられる層及び遺構は認められず、この地点での人の定住は井戸の構築時期と考えてよいようである。

遺物

調査地点での出土遺物は小量の土師器、須恵器片を除いては、瓦器椀、瓦器小皿、土師質皿、ねり鉢、石釜、屋瓦等の中世遺物が大半を占めている。しかし、遺構に伴う遺物は井筒に使用された土釜に限られていて、他はすべて2次包含層からの出土で層位的に得られた資料ではなかったが、遺物は比較的限られた時期のものである。

瓦器（1.3.6.7.10.11.12.13.14）……Aタイプ

完成を含み良好な資料が9点出土している。高台は、比較的しっかりした貼付け高台で三角形と台形を呈するものとに分けられる。調整は口縁部にナデを施すが、外面は底部まで指頭圧痕の凹凸面を残す。体部内面及び底部内面は丁寧なナデを施し平滑に仕上げている。暗文は外面に施す（1.3）を除いてすべて内面に限られる。見込み部暗文では斜格子文（1.3.6）、複雑な斜格子文（10.11 ）を施すものが認められる。また、（1）は内面底部及び外面には明瞭な暗文を施すが、体部には条線状の暗文は認められず全体にナデを施すものである。口縁径は15.2㎝～15.5㎝・器高5.4㎝・高台径5.1㎝～5.5㎝・器高指数は35～37である。色調は黒灰色で器壁は3㎜～4㎜、胎土は乳灰色で微砂が混る。

瓦器（2.4.5.8.9）……Bタイプ

全体に器高の低平化と小型化が顕著に認められる。高台も簡素化され、粘土紐を貼り付けて軽くナデただけのもの（2.5）や押え付けられてまったく高台としての役を果たさないもの（8）や高台が一周せず馬蹄形にとどまる（4）が認められる。調整は体部内面及び底部を平滑にするもの（5.8）底部内面に指頭圧痕を残しその上をナデるもの（2）が認められる。外面は口縁部にヨコナデを行なうが体部から底部にかけては指頭圧痕を残す。暗文は内面に限られていて底部から体部にかけて不規則な暗文を施す。見込み部暗文では螺旋状の暗文を描く（2）や底部で輪状文を施す（8）や底部に平行文を施す（4.5）がある。全体にAタイプに比べて炭素付着の不良が認められる。口縁径13.1㎝～14.8㎝・器高3.3㎝～3.9㎝・高台径2.5㎝～3.9㎝・器高指数は23～27である。色調は灰色及び淡灰色で器壁は3㎜～4㎜胎土は乳灰色で微砂が混る。

瓦器小皿（15～21）

わずかに外反する口縁部を持ち、端部は丸く終るものが大半を占める。（17）のように体部外面をヘラケズリにより調整するため明瞭な段を有するものや、（19.20）のようにヨコナデにより体部と底部の境を造りだすものとがある。また（18）は内面にヘラ描きの沈線を一本巡らしている。焼成は

良好で色調は大半が黒灰色を呈しているが（１６）のように弱い環元炎で焼かれたためか瓦器質に成りきっていないものもある。胎土は微砂を含む精良粘土を使用している。

土師質小皿（２２～３４）

底部よりゆるやかに内彎して立ち上るもの（２５.２６.２８.３０）、底部より斜方向に立ち上るもの（２２.２３.３４）、口縁部が外反気味で終るもの（２４.２９）、体部外面をヨコナデすることにより底部と体部の境を明瞭に示すもの（３１.３２）等が認められる。胎土には小砂粒が混り焼成は良好で色調は明橙色である。

土師質中皿（３５～３６）

（３５）底部より内彎して立ち上り口縁端部は尖り気味で終る。体部上部はナデを施すが底部は未調整である。また、体部中段にはヘラ描きによる１本の沈線が認められる。（３６）は底部よりゆるやかに立ち上り端部は平担面をもって終る。口縁部及び内外面はナデにより調整されている。両者とも胎土に、小砂粒が混り焼成は良好で淡赤白色の色調である。

土師質大皿（３７）

体部中段より角度を変えて斜方向に立ち上り端部はやや尖り気味で終る。体部はヘラケズリが認められるが他はすべてナデによる調整である。胎土は小砂粒を含み焼成はやや不良で淡褐色の色調である。

土釜、石釜（３８～４０）

（３８）肩部から口縁部にかけて強く内傾し、口縁部は外側方向に折り返えされている。鍔は貼付によるもので突出度も低く断面三角形を呈する。調整は口縁部及び内外面に丁寧なヨコナデを行う。胎土は小砂粒を多量に含み焼成はやや不良で乳白色である。

（３９）口縁部は内傾気味に立ち上がり口縁端部で外側へ大きく外反する。鍔は薄手で下向きにつけられている。調整は口縁部及び鍔部をナデにより行い内面はナデと一部にヘラ磨きが施されている。胎土は小砂粒を多量に含み焼成は良好、外面乳白色で内面は茶褐色である。

（４０）滑石製の石釜で断面三角形の鍔がつく。調整は内面では平滑な面を造りだすが外面は細かいノミ痕を数多くのこす。

ねり鉢（４１～４４）

（４１）胴部より内彎気味に立ち上り、肩部から口縁部にかけて外反し、口縁端部は平担面をもって終る。調整は口縁部及び内面はヨコナデを行ない外面はヨコハケを施す。色調は灰色で胎土は小砂粒が含まれ、焼成は良好で瓦器質である。

（４２）底部より斜方向に立ち上り、口縁部は上部につまみ上げた形をとるもので端部は尖り気味に終る。調整は口縁部及び内面は丁寧なヨコナデが行なわれ、胴部には２条の沈線が認められる。胎土は微砂を含み焼成はやや不良で軟質である。色調は全体に灰色を呈するが口縁部は淡黒灰色である。

（４３）底部より斜方向に立ち上り、口縁部は内反気味に直立する。内外面ともヨコナデ調整が行なわれるが、特に口縁部の調整は丁寧である。須恵質の焼成で色調は淡灰色を呈し胎土には細砂が含まれている。

（４４）口縁部は「く」の字に屈曲し、端部は内側へ肥厚する。内面及び口縁部はヨコナデを施す。外面もヨコナデ調整を行なうが、ヘラによる２条の沈線を残すなど全体に粗い仕上げである。須恵質の焼成で胎土には細砂粒を含む。

屋瓦（４５～４７）

軒丸瓦

（４５）瓦当部が四分の一ほど残存するだけの破片であるが右回りの三巴を主文に配し、巴尾は長く半円を描くものと思われる。圏線はやや太めで、外区内縁には大粒の珠文を巡らす。外縁は、内縁側に未調整部分を残すが、外側の縁はヘラにより面取りされている。胎土は微砂及び石英粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

軒平瓦

（４６）瓦当面に対して左半分を残す破片で中央部を欠くが、現存面では独立した唐草文を４回反転まで確認できる。外縁は幅狭で比較的高位置にある。また、瓦当部と平瓦との接合部は、平瓦凸面端部に粘土塊を押えつけて幅広の顎部を造りだしている。外縁下区及び脇区の縁はヘラにより面取りを受けるが、上外縁の一部には布目痕が残されている。胎土は微砂及び石英粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

（４７）

瓦当部の中央部のみ残存する破片であるが現存部においては、三角形が上下に交差する複合鋸歯文状の文様が確認できる。外区内縁には、小粒で粗い間隔の珠文を巡らす。外縁下区は欠損していて不明であるが、上外縁には布目が残されている。

瓦当部と平瓦の接合部は単位の大きなヘラケズリが行なわれ、幅狭の顎部を作っている。胎土は石英粒や、大粒の長石粒を含み、焼成は良好で灰色を呈する。

土師器（４８～５１）

（４８）口縁部は外反しながら「く」の字形に屈曲し、端部は上方へつまみ上げられる。外面は右上りの細い叩き目で調整され、口縁部内外面はナデ、体部内面は左から右へのヘラケズリを行う。胎土は石英の砂粒を含み焼成は良好で茶褐色を呈する。

（４９）口縁部は「く」の字に屈曲し、端部は内側へ肥厚している。調整は口縁部及び外面体部を丁寧にナデ、体部内面はヘラケズリが行なわれている。胎土は小砂粒を多量に含み、焼成はやや不良で軟質である。

（５０）口縁部は外側に断面三角形の稜を持ち、内反気味に立ち上り、口縁端部は内側へ肥厚している。調整は口縁部及び外面体部はナデ、体部内面はヘラケズリが施されている。胎土は長石粒を多量に含み焼成は良好で外面は乳灰色で、内面は黒灰色である。

（５１）口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は内反気味に上方へつまみ上げられ丸味を持って終る。口縁部はハケ調整後ナデを行う。体部外面は縦方向のハケを施し、内面はヘラケズリを行う。胎土は小砂粒を含み焼成は良好で乳灰褐色である。

須恵器甕

（５２）口頸部は外方向に開き口縁端部は斜方向に平端面を持って終る。内面及び口縁部には丁寧なナデ調整が行なわれ、外面口頸部は左傾の叩きを施し以下の胴部は横方向の叩きを行う。胎土は微砂を含み焼成は良好堅緻で灰色を呈する。

土師質甕

（５３）口頸部より外側へ強く外反し、口縁端部は外側に向く。調整は口頸部外面は左傾の叩き後ナデを行ない、以下の胴部外面は横方向の粗い叩き目を残す。口縁部内面及び体部内面はナデを施す。胎土は小砂粒を多量に含み焼成は不良で外面黒灰色、内面は淡灰色の色調を呈する。

遺物小結

出土遺物は小量の土師器・須恵器を除いては瓦器椀・瓦器小皿・土師質皿・ねり鉢・土釜・屋瓦等の中世遺物が大半を占めていた。しかし、遺物はすべて流入による２次包含層からの出土であるため一括資料としては認められない。その中において中世遺物の年代の指標となる瓦器椀は調査地より比較的多量に出土している。瓦器椀はいわゆる和泉型と呼ばれるもので大別するとＡ・Ｂの２タイプに別けることができた。

Ａタイプは口縁径１５.２㎝～１５.５㎝・器高５.４㎝～５.６㎝・高台径５.１㎝～５.５㎝で器高指数は３５～３７である。全体に外面の暗文が一部を除いては省略化されているため外面には指圧痕が多数残されている。内面の見込み部暗文は螺旋状文と格子文を施すものが大半を占めている。高台は比較的しっかりした貼付高台で断面三角形及び台形を呈している。このような特徴からＡタイプは白石編年①のⅡ－３型式、はさみ②山遺跡編年のⅣ期に比定されるものと考えられる。

Ｂタイプは口縁径の１３.１㎝～１４.８㎝・器高３.３㎝～３.９㎝・高台径２.５㎝～３.９㎝をはかる。全体に器高の低平化と小型化が顕著に認められ高台の簡素化も一層進む。見込み部暗文も大園遺跡③のⅢ類以後に見られる連結輪状文や平行線文が施されている。焼成面では一部に炭素吸着が不十分で色調が灰白色を呈するものも認められる。器高指数も３０以下で大園遺跡編年のⅣに共通するものと考えられる。Ｂタイプは白石編年ではⅢ－１、Ⅲ－２、はさみ山遺跡編年のⅥ～Ⅻ期に比定されるものと思われる。

このようにＡ・Ｂタイプの瓦器椀に伴う資料が本遺跡の中世遺物の年代の上下限を示すものと考えられ、上限は１２世紀後半～１３世紀初頭、下限は１３世紀前半から１３世紀後半頃に比定されるものと考えられる。

まとめ

長瀬川と平野川に挟まれ、渋川村を頂点とするこの大三角州状堆積地は旧大和川（長瀬川）、平野川流域の中でも比較的早くから開かれ集落の発達した地域である。飛鳥時代に創建をみた渋川廃寺をはじめとして式内古社の存続がこれを物語っている。『崇峻前紀』に見える物部氏阿刀別業も式内跡部神社を中心とするこの地区に考えられ、中世室町時代の河内争乱期にこの地の古刹真観寺は重要な役割を荷っている。

今回の調査ではこれらの史実、伝承を積極的に証する知見は得られなかったが、Dグリッドにのこされた土釜井戸をはじめ、いずれのグリッドからも僅かながら出土した鎌倉～室町時代の遺物は中世におけるこの地に旧存した集落と真観寺とに深くかかわるものであるし、深層部の古式土師器ほか古墳時代の遺物はこの地の開発の古さを物語るものである。

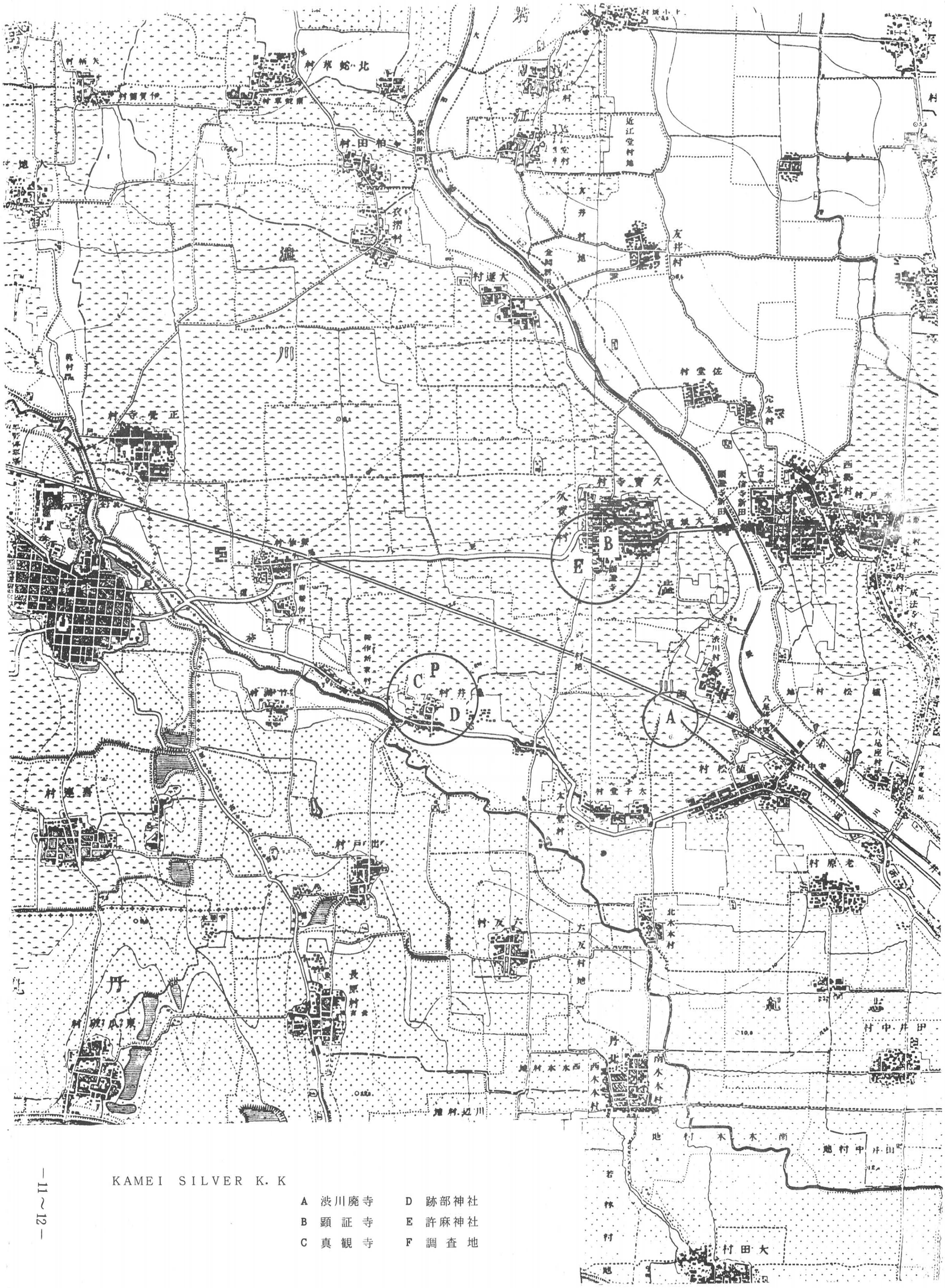
この地域の南を限る平野川に沿う亀井遺跡は弥生時代初期にはじまる集落跡であり、長瀬川左岸に確認された最も古く規模の大きい複合遺跡でもある。この亀井遺跡と今回の調査地とは南北に僅か200 mを隔たる地点にあるが、この両地点の古代における繋がりは摑み得なかった。しかし将来この関係は明らかとされるであろう。同様にこの大三角州状堆積地もまた地下調査と過去の資料も含めた充分な資料は得られていないが市域における埋蔵文化財包蔵地として解明されることであろう。現在この地域は周知の埋蔵文化財包蔵地として認識されていないが八尾市はもちろん河内平野における重要な遺跡としての可能性を持っているようである。

注

① 白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器」『古代学研究』８５　１９７７年

② 尾上実『狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会　１９７８年

③ 神谷正弘他『大園遺跡発掘調査概報』２
大園遺跡調査会　１９７６年



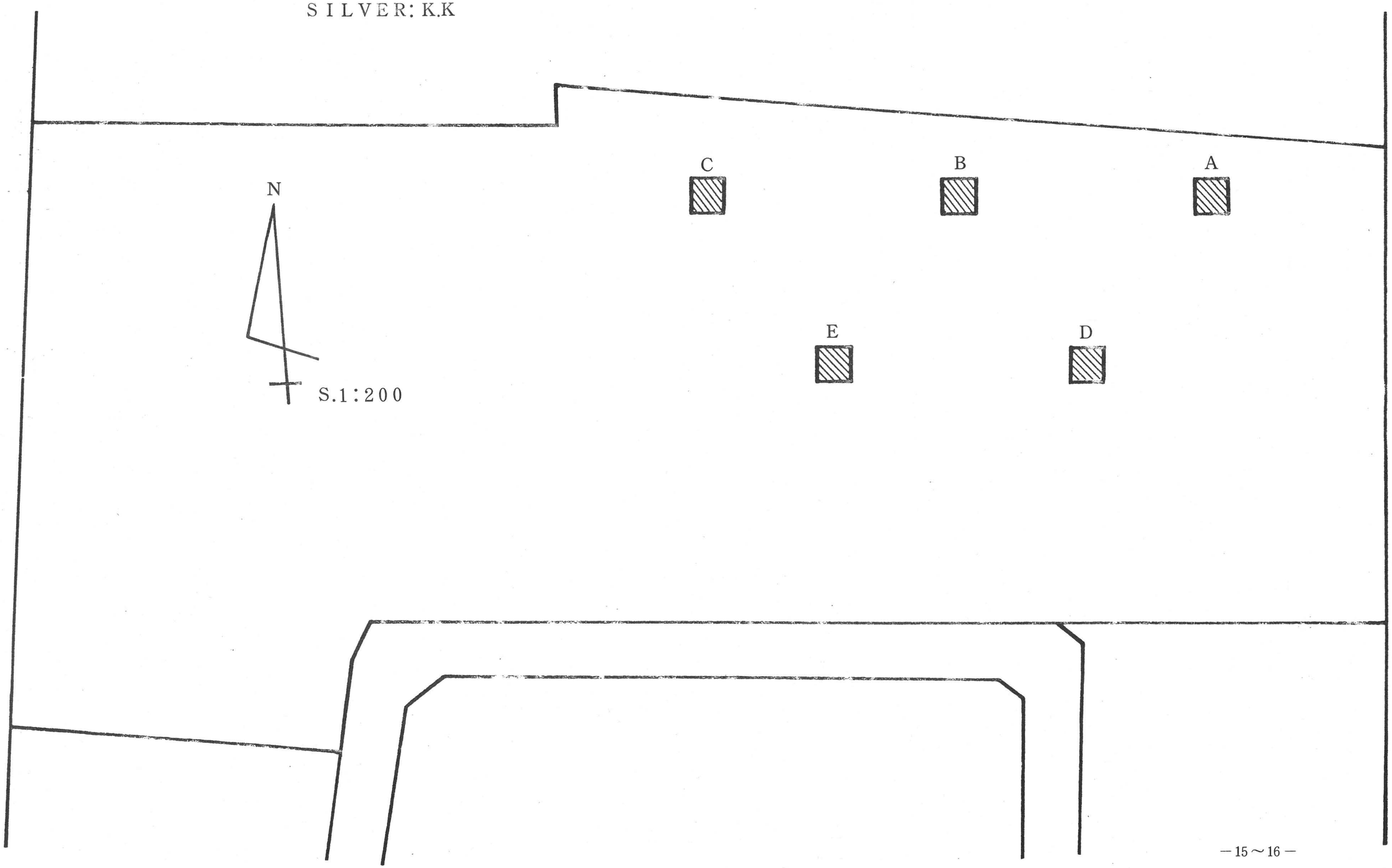
KAMEI SILVER K. K

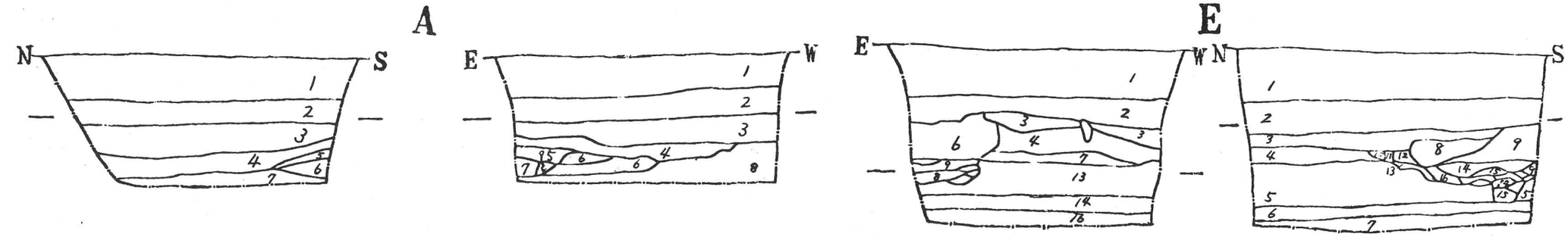
A 渋川廃寺　　D 跡部神社
B 顕証寺　　E 許麻神社
C 真観寺　　F 調査地

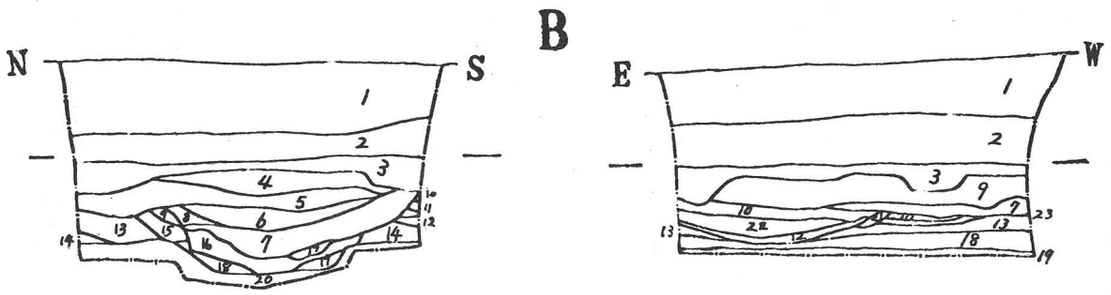
シャープ保税工場
早川電機工業
亀井
竜華操車場
協和電磁
日東紙器工業
八尾工場
プール
シャープ早青寮
金本工業
都屋
仲西工業
北亀井町二丁目
東伸熱工
八尾工場
北亀井町一丁目
シャープ電化事業本部
跡部北の
日本金属製作所
新潟運輸
八尾支店
北亀井町三丁目
新家歩道橋
貞観寺
東陽工業
八尾工場
大阪球
丸善楽品産業
亀井町四丁目
亀井町三丁目
シャープ精機工場
大阪燃系
跡部神社
亀井保育園
山治商会
亀井町二丁目
本田燃系工場
公園燃系
主要地方道大阪中央環状線

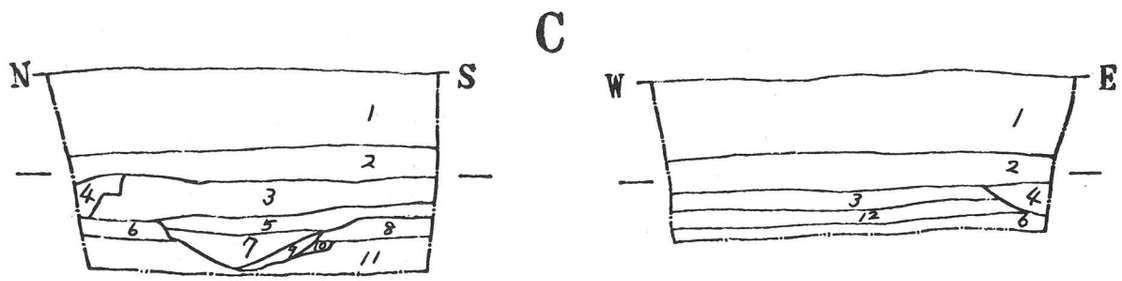
KAMEI.

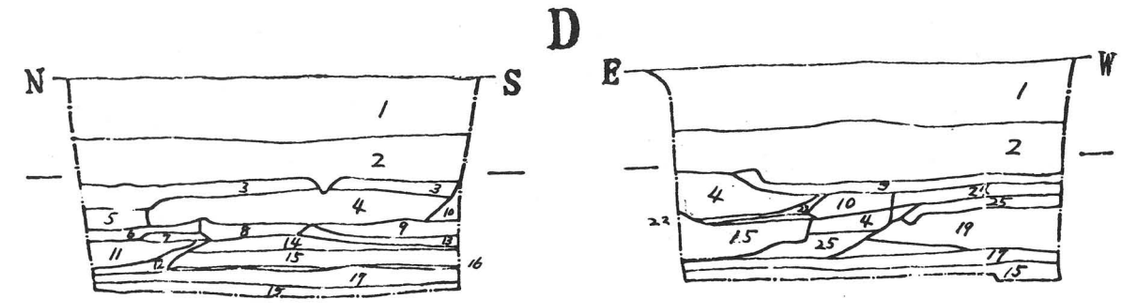
SILVER: K.K











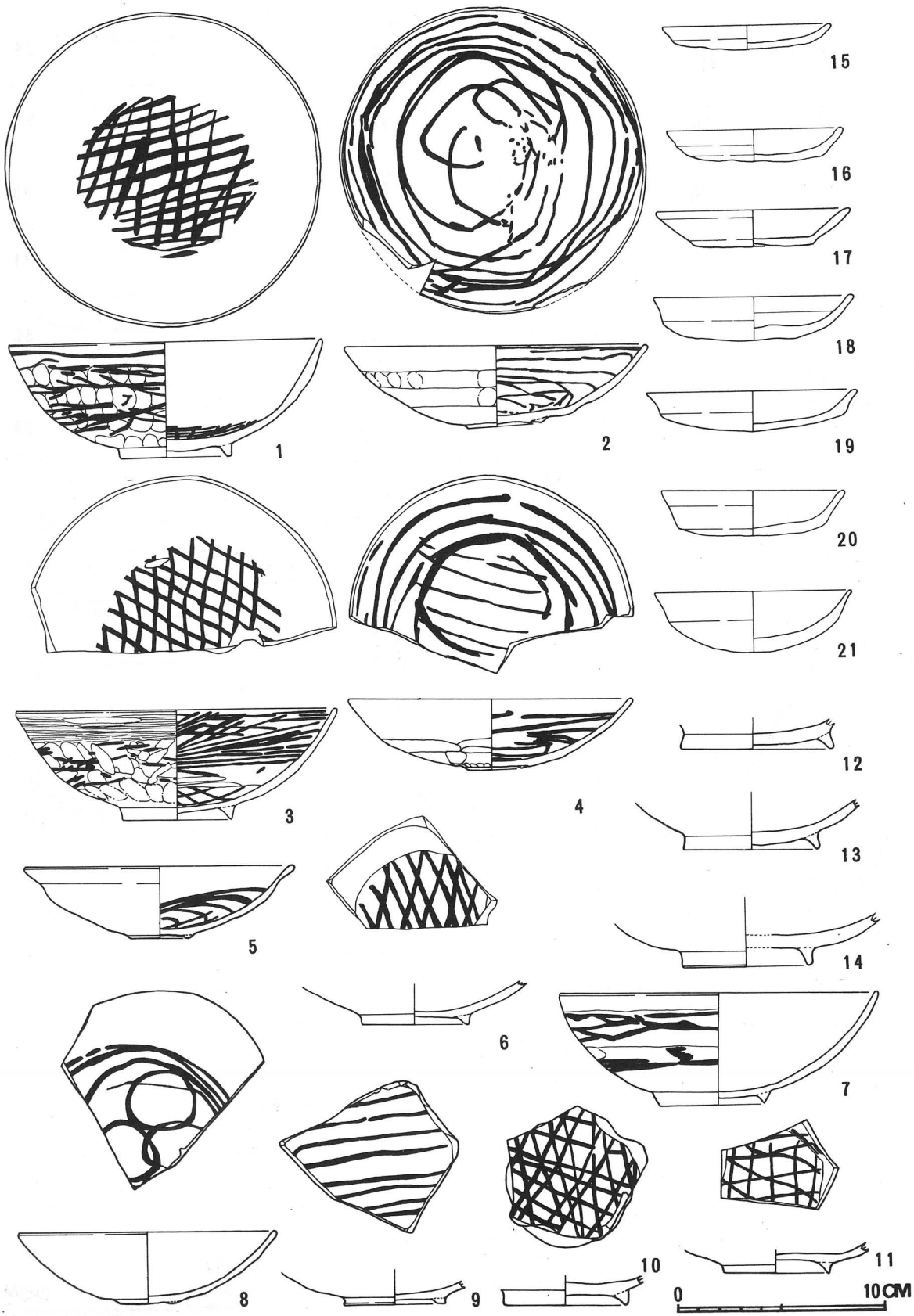
A 1.盛土　2.旧表土　3.暗青灰色土　4.青灰色粘土　5.灰色粘土　6.褐灰色粘土　7.灰褐色砂質粘土　8.灰色シルト

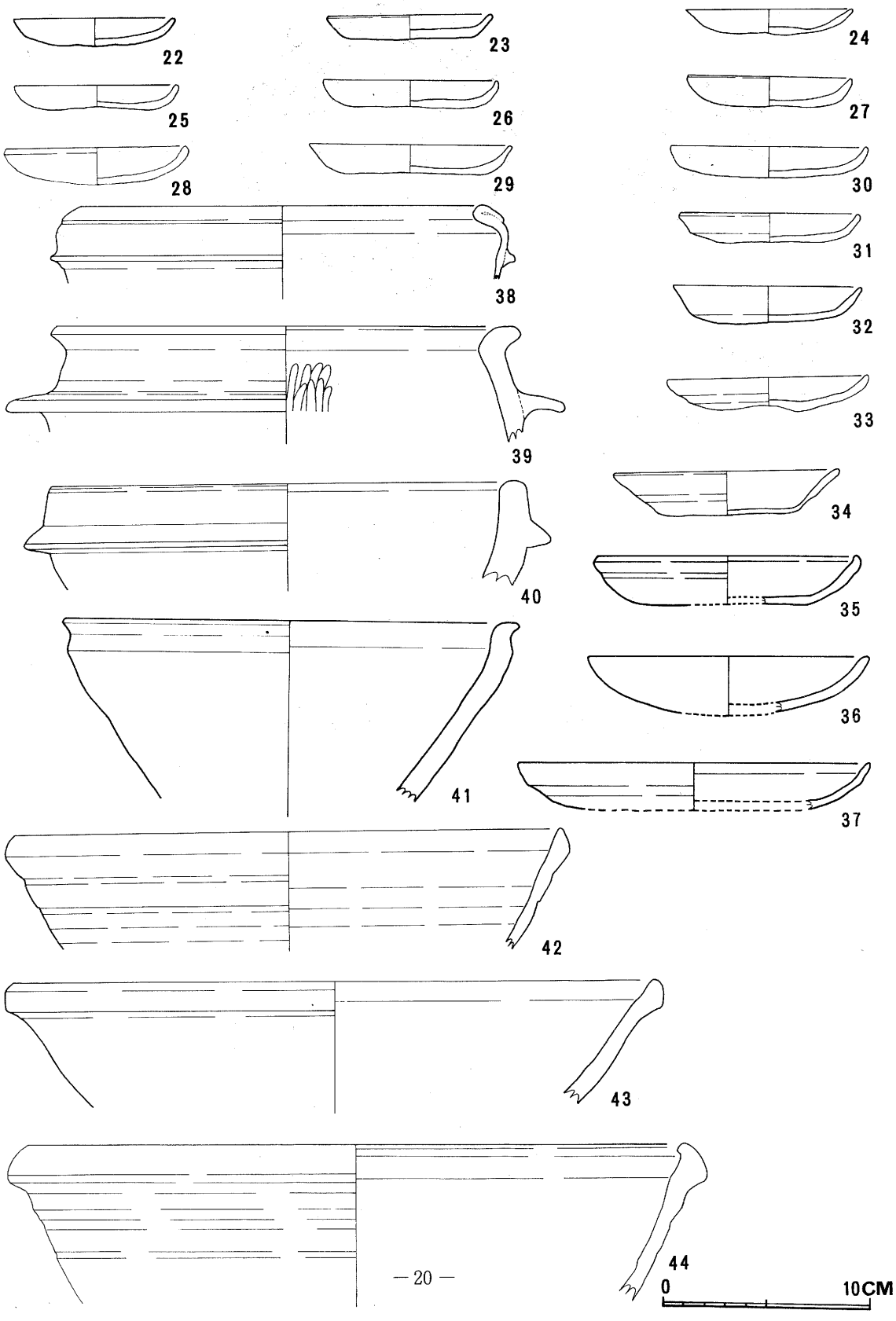
B 1.盛土　2.旧表土　3.暗青灰色土　4.黄緑灰色粘砂　5.青灰色粘質細砂土　6.青灰色粘土　7.緑灰色粘土　8.青灰色粘土　9.灰色砂混り粘土　10.淡灰色細砂土　11.淡褐灰色粘土　12.褐灰色粘土　13.淡黄灰色微砂土　14.淡灰白色砂土　15.灰色粘質細砂土　16.暗灰色粘土　17.灰色粘土　18.淡灰色中砂土　19.暗灰色シルト　20.赤褐色中砂土　21.暗緑灰色粘土　22.淡褐色粗砂土　23.淡灰黄色中砂土

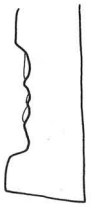
C 1.盛土　2.旧表土　3.暗青灰色砂質土　4.撹乱　5.暗青灰色粘質土　6.青灰色砂質土　7.灰茶色粘土　8.淡赤褐色砂質土　9.暗灰色粘土　10.白灰色沙質土　11.淡灰色砂質土　12.暗灰色粘質土

D 1.盛土　2.旧表土　3.暗青灰色土　4.黄褐色粘砂土　5.茶褐色粘土　6.淡茶色粘土　7.黄灰色粘土　8.淡灰褐色粘砂土　9.赤褐色粘砂土　10.黄茶褐色粘砂土　11.青灰色粘土　12.黒色粘土　13.淡灰色粘土　14.灰色粘土　15.茶灰色粘土　16.灰白色細砂土　17.暗灰色粘土　18.淡青色砂質土　19.淡灰色砂質土　20.青灰色砂質土　21.青色砂質土　22.緑灰色粘土　23.褐灰色粘土　24.青白色砂質土　25.灰色砂質

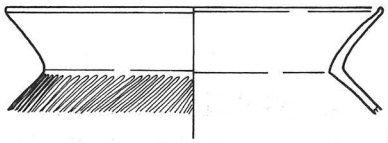
E 1.盛土　2.旧表土　3.暗青灰色土　4.灰色砂質土　5.青黄褐色粘砂土　6.淡灰褐色粘土　7.青灰色粘土　8.黄灰色粘土　9.灰色粘土　10.赤褐色中砂土　11.黄灰色粘土　12.褐灰色シルト　13.灰色中砂土　14.灰褐色粘土　15.暗灰色粘土


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
10CM

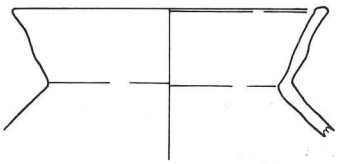

22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
38
32
39
33
34
40
35
41
36
37
42
43
44
0
10CM



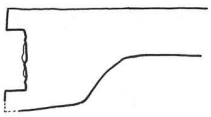
45



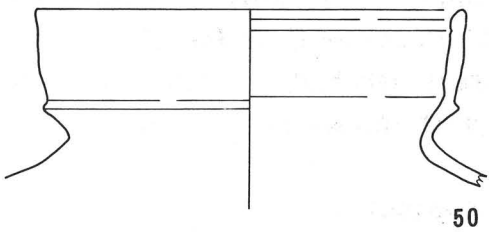
48



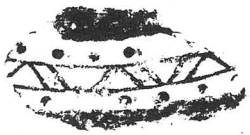
49

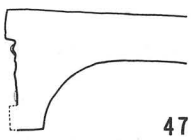


46

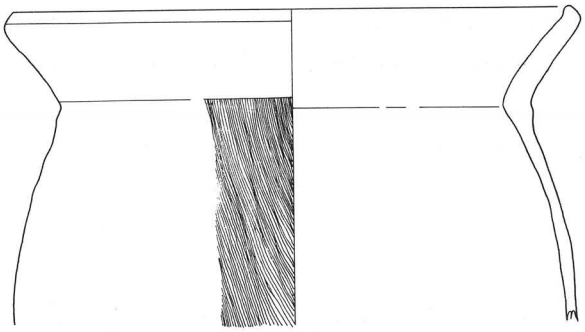


50

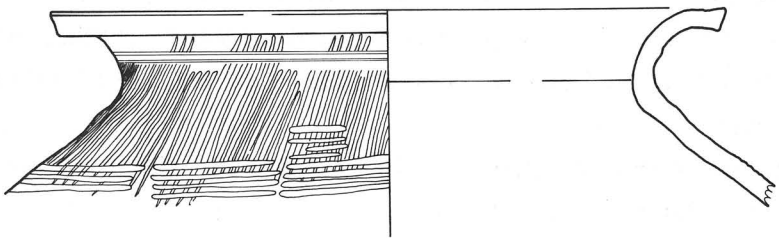




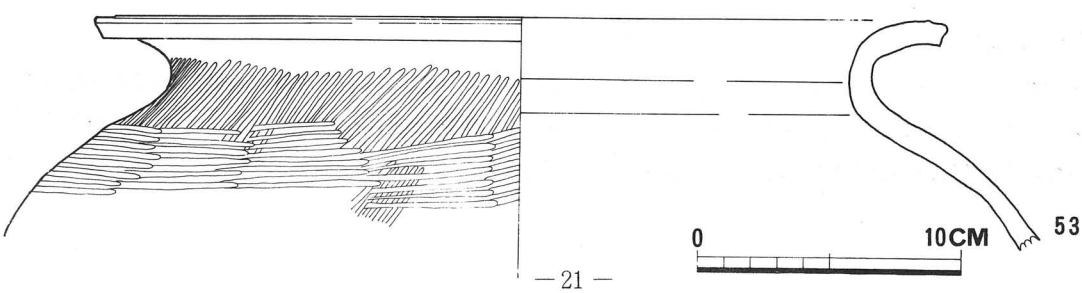
47



51



52



0 10CM

53

3. 日本電信電話公社
電話地下線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査

昭和５３年度事業として計画された同工事は八尾市内における著名な埋蔵文化財包蔵地の大半に関連を持つものであった。

調査については大阪府教育委員会文化財保護課を中心に再三にわたる協議の結果、八尾市教育委員会によって工事に並行して調査することとなった。

掘削は全域が現道路面で、既にいくつかの工事によって地下はかなり撹乱されていることが予想されたが可能な限り記録をとることにした。

小阪合遺跡

昭和２７年、大阪府営小阪合住宅が建設された際、旧水田面下約５０cm～８０cmに古墳時代（６世紀を中心としたもの）の夥しい土器の出土があった。

小阪合地区は楠根川に沿う水田地帯で、南に接して拡がる中田遺跡と同様に弥生時代後期から中世鎌倉時代末期まで存続した低湿地集落の旧存した地域である。集落は室町時代に一時他の土地に移動したものか同時代の遺物の出土をみていない。現在の小阪合町は推定江戸時代初期の頃に成立したようである。

阪合部の祖神を祀る小阪合神社は式内社でこの集落の氏神であった。

調査

舗装路面下約６０cmで旧水田の床土層に達する。床土は淡黄褐色で粘度の高い精土が用いられている。床土の厚みは約３０cmで遺物は包含されていない。第３層は淡青灰色の遺物包含層となってひろがっている。土質は微砂質土で若干の地下水を含み比較的軟弱である。遺物は僅少で、土師器片、須恵器片である。中に瓦器片がみられるがこれは後世の混入遺物と考えてよいものである。遺物はいずれも磨耗が著しく他地点からの移動とみてよいものである。

工事による掘削が極めて部分的で遺物包含層のひろがりと、遺構との関連は確かめ得ないが近接してこれらの土器を包含する部分のあることが察せられた。

中田遺跡

昭和４６年から４８年にかけて発掘調査が行われた。弥生時代後期から室町時代末期にかけての複合遺跡である。調査面積は約15,000㎡に住居区、墓域、水田区と大別される集落跡であることが判り、古代低平地集落の基本的な形態を伝える遺跡として注目された。

調査

舗装路面下約８０cmで旧地層の第３層に当る黒色粘土層がある。層中には小礫がまじり、層の厚みは平均して５０cmである。つづいて第４層は約３０cm厚みの黄褐色土層となり、この層中に土師器片、瓦器片が包含されている。中田遺跡では旧水田面下約４０cmから６０cmに鎌倉時代の集落跡、寺院跡、多くの井戸などがあり８０cmを超えると古墳時代層と弥生時代後期層となる。この第４層の黄褐色土層中に中世の瓦器片の混ることは同遺跡としては初見である。たまたま今回の調査地が同遺跡内に旧存した金性寺跡（鎌倉時代）に近いところから、あるいは同寺関係の遺物であるのかも知れない。また第４層が鎌倉時代の整地層で、第５層が古墳寺代層になるのかも知れない。このことは北接して関西電力送電線埋設工事でも注意されたことであった。中田遺跡の生活層を摑む上での重要な課題となった。

東弓削遺跡

東弓削遺跡は昭和５０年から昭和５１年にかけて行われた大阪府水道部の送水管埋設工事で確かめられた遺跡である。弥生時代中朝から古大和川の三角州に住居を定め小集落の散在していた地域である。降って奈良時代は弓削氏の本貫地として弓削寺が建立され、また由義行宮、西の京の計画もあった地域である。

調査

調査地は旧大和川の本流である長瀬川氾濫原の東縁に位置する部分で、古くは畑地としてしか利用度のない砂礫の堆積地である。従って遺物、遺構の出土はなかったものの、旧大和川の氾濫原東縁に近い水路底には古墳時代の土器片があり、一応は調査と観察の必要のある土地である。砂礫部と粘土部の接する土層は複雑で粘土層が一段高い砂礫層の下に部厚く入りこんでおり、粘土層も中に微砂を含むもので色調、土質からみると深層部には弥生時代の遺構、遺物が包含されている可能性がある。今後のこの地区の深層部には注意が必要であろう。

亀井遺跡（跡部遺跡）

平野川と長瀬川に挟まれた三角州状のこの一帯はきわめて古い歴史を伝える地域で、弥生時代前期から室町時代にかけての集落遺跡が散在している。このうち亀井小学校の一画は式内跡部神社を中心として古墳時代の遺物の埋蔵が顕著である。同小学校建設工事では土器に混って銅鏃の出土があり、また水田の柵跡らしい杭列が認められている。

調査

跡部神社前から小学校西側に至る南北道路は最も注意を要する部分と考えられた。

路面下約５０cmで黄褐色粘土層がひろく拡がっている。この層は旧水田の床土に当るようで時期は鎌倉時代末期から室町時代初期の頃と推定される整地層である。層上面に瓦器片、陶器片が僅かながら認められ、層上面も汚れている。層は小学校地の調査では厚み約1.0ｍ～1.5ｍを測るものであった。本工事の掘削は整地層内であったところから次の第３層に包含されている可能性のある遺構、遺物に直接

影響がなく調査は本格的なものとはならなかった。瓦器片、陶器片は共に良質で、とくに舶載かと思われる青、白磁の小片はこの地における中世集落の性格を窺わせる資料といえるものである。

あとがき

今回の調査は工事に並行する立会を主としたもので記録的にも充分なものとならなかった。一般に路面掘削工事は既設工事による撹乱などで資料的にも完全な調査に期待は持てないものである。しかし工事と調査との間に緊密な協力意識と体制がとられれば悪条件下にあってもかなりの調査記録をのこすことは可能である。このことは同質の多くの工事立会調査記録がこれを証している。本調査については部分的に若干の遺憾をのこしはしたものの、貴重な資料を得ることができ、将来への参考となったことを記しておきたい。

4. 小阪合遺跡
関西電力ＫＫ送電線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査

近鉄八尾駅前開発整備に伴って関西電力ＫＫは八尾東郷変電所から八尾駅前まで送電線の埋設工事を計画した。このルートは南部が中田遺跡に接し、北部は小阪合遺跡に接するものである。中田遺跡は昭和４９年の遺跡範囲確認調査で青山町３丁目（東郷変電所東隣）に古墳時代の遺物包含層が確かめられており、一方小阪合遺跡は昭和２７年大阪府営小阪合住宅建設に際し古墳時代の夥しい土器の出土があった遺跡である。

調査

調査は大阪府民センター前交叉点から北をＡ地区、南をＢ地区とし、それぞれを２区に分割し記録した。そして府道萱振曙川線から東郷変電所までの市道部をＣとした。

Ａ－１

道路面下約８０cmは路床の盛土である。続く約２０cmは細砂を含んだ黒色土で、この層の上に旧水田の床土、耕土が旧存したようである。次の第３層の灰黒色粘質土層中に中世の遺物片が若干みられるが、この層に遺構は存在しないようである。この層は中世時期の耕土と考えてよいものである。それは第４層の暗褐色土が平均２０cmで山土状の整地層でこの層が第３層耕土の床土に当るものかとも考えられ、つづく第５層も第４層と同様に整地土層のようである。第６層の赤褐色土層中には土師器片、須恵器片が僅かながら混っている。これら土器片は層のほぼ上部に小破片で混入している遺構に伴うものではない。昭和２７年の府営住宅建設時に出土した土器群はこの赤褐色土層とほぼ同じ深度で、旧水田面下約１ｍであったのでこの赤褐色土層につづく近辺に遺構の埋没が考えられる。

Ａ－２

Ａ－１から南へ約１０ｍは旧地層がかなり撹乱をうけている。第２層の灰黒色土層中に中世遺物は認められないが、Ａ－１の第３層に続く層と思われる。第３層の赤褐色土は平均５０cmと比較的部厚くひろがっている。この層で遺物は全く見られず、第５層の黄褐色砂質土層に磨耗の著しい土師器の小片が数点見られる程度である。

遺構面はＡ－１の深度からみて第４層の灰褐色粘土層がこれに当るものであるかも知れないが、第４層は粒子の細かい粘度の高い層で、遺構層となる可能性は少ないように思われる。さらに第４層のひろがりを確かめたが撹乱が激しく、また遺物の出土もみられなかった。

Ｂ－１

府民センター前の府道交叉点を中心とした一帯は上下水道をはじめ各種の埋設物関係の工事で撹乱をうけており、旧状を遺す部分が見当らない状態である。

第２層の暗黒色土層はＡ－１の黒色細砂まじり層に近いものである。第３層の青色粘土層中には部分的に細砂の堆積したブロックの箇所がみられる。第４層の赤褐色粘土層はＡ－１、２とほぼ同様の土質であるがわずかに粘土っぽいものである。この層でも遺物の混入はみられない。

Ｂ－２

中田遺跡の北縁区の部分に当ると思われる。第２層の黒色粘土層はＡ－２、Ｂ－１の第２層に続く層である。第３層の赤褐色土層はＡ－２とほぼ同質のものである。中田遺跡での同色の土層は鎌倉時代の生活層となるものであるが、層深度からみるとやはり小阪合遺跡の古墳時代生活面の基盤となっている層であろう。第４層の淡黄褐色粘質土層以下は湧水が目立つところから第３層は整地された層とみてよいようである。従って層中にわずかに見られる土師器の小片は土工中に入りこんだものであろう。

今回の関西電力送電線埋設ルートの萱振曙川線は路面下に多くの既設管が埋設されており、全ルートについて記録のとれる状態でなかった。部分的に遺っている層序からの推定では第３層ないし第５層の整地層上面に中世および古墳時代の集落跡の遺存が考えられる。この小阪合遺跡は楠根川の両岸にひろがる集落跡遺であるが集落の中心が現在の式内社阪合神社のある小阪合地区であるのか、又は左岸の府営住宅から南へのびる微高地帯であるのか判然としない。しかし古墳時代後半の遺物として知られる石製模造玉類が東郷変電所付近一帯の畑地から夥しく出土しているところから遺跡の中心は青山地区北部から小阪合地区南部の楠根川左岸の微高地帯に想定してよいように思われる。

KOSAKAI - KANDEN

A-1

A-2

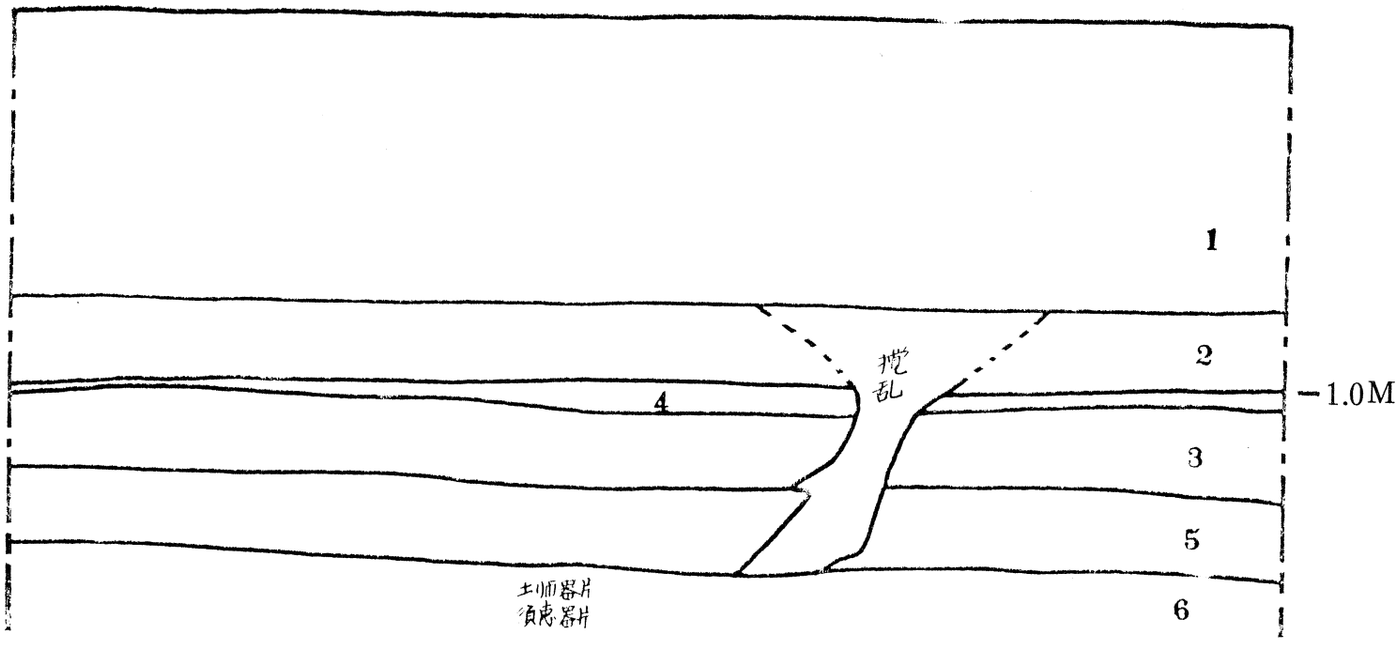
B-1

B-2

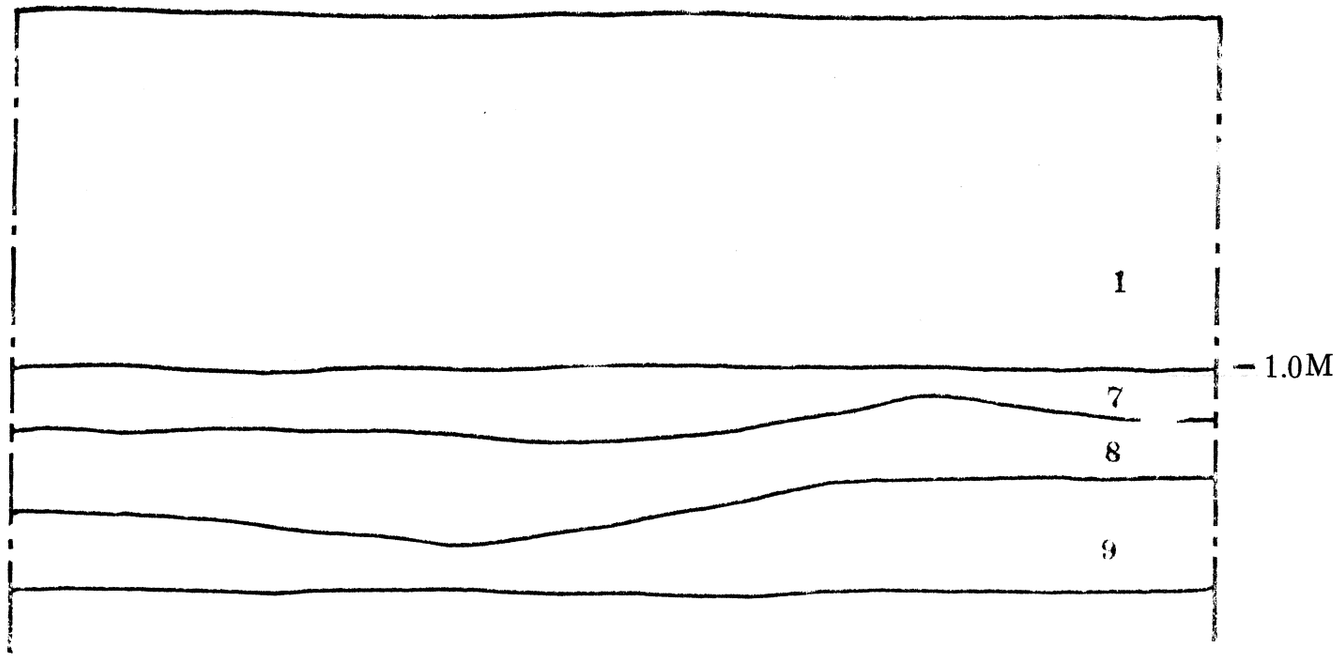
C

K.S.K S 1:20

KSK. A—1

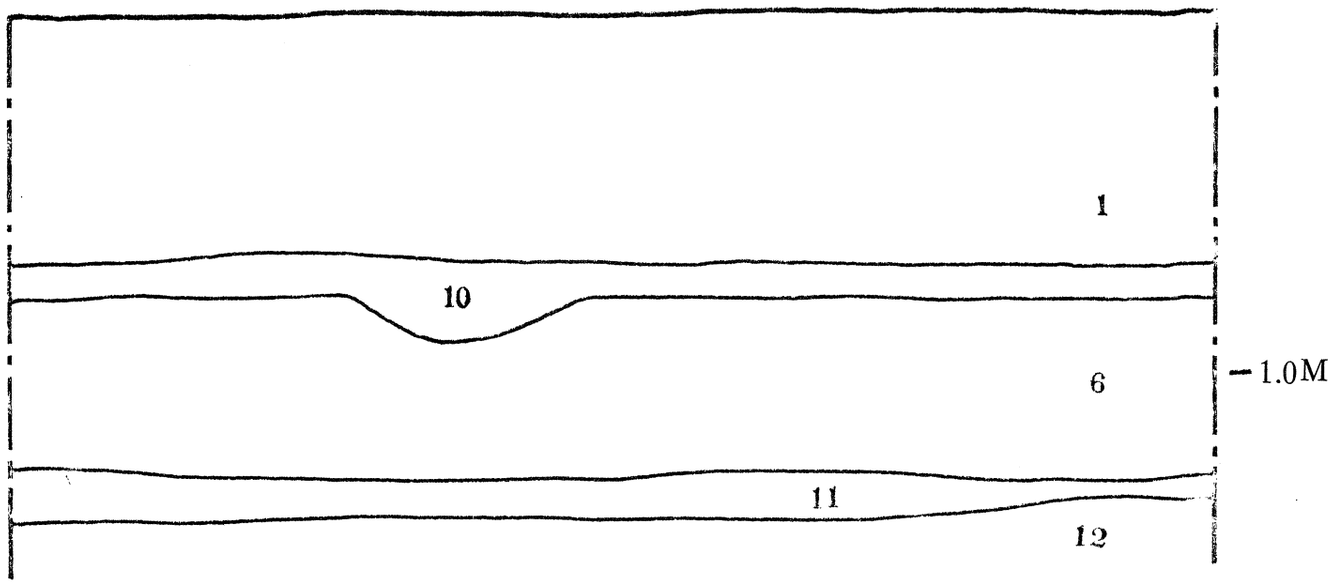


KSK。B—1

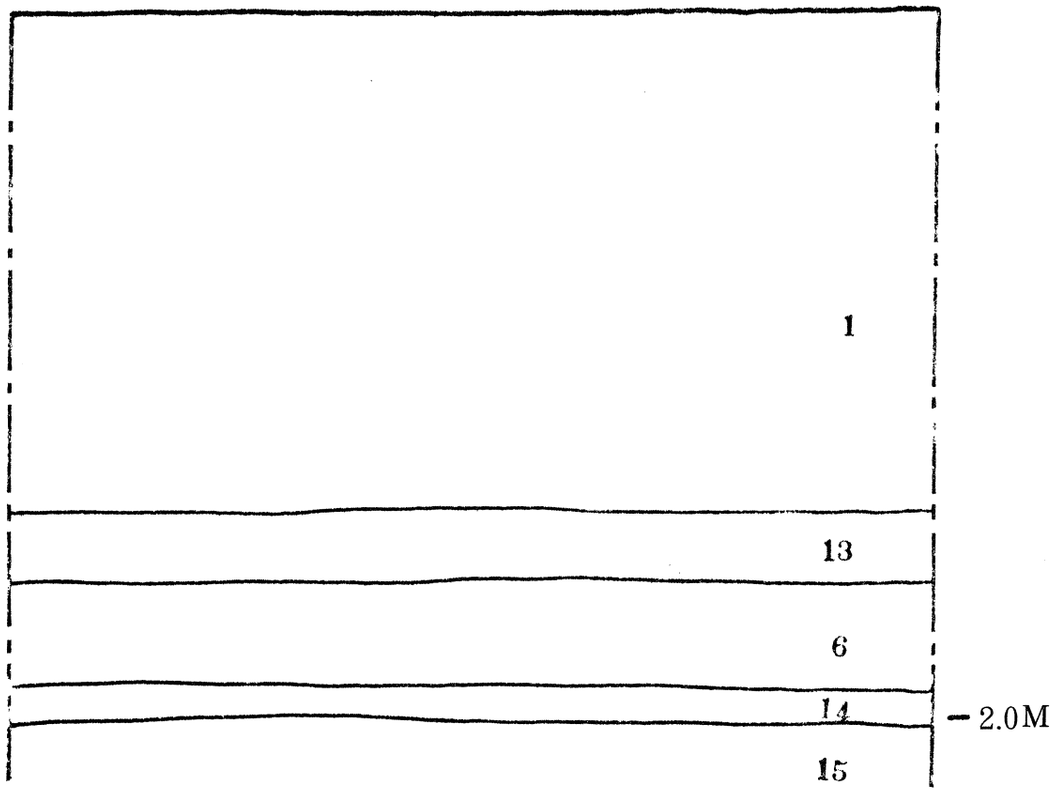


1	盛土	6	赤褐色土	11	灰褐色粘土
2	黒色細砂まじり土	7	暗黒色土	12	黄褐色砂質土
3	暗褐色土	8	青色粘土	13	黒色粘土
4	灰黒色粘質土	9	赤褐色粘土	14	淡黄褐色粘質土
5	暗黒灰色礫まじり土	10	灰黒色土	15	黄褐色細砂まじり土

KSK。A—2



KSK。B—2



5. 佐堂遺跡

、分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査

八尾市美園町２丁目１０９－３の地は推定佐堂遺跡の北西限に位置する。昭和５３年、美園町３丁目に建設された水泳プール工事に際し事前調査を実施した結果、古墳時代前期の遺物の出土があり、包含層の堆積の状況から推して美園町１丁目、２丁目付近に遺物を多量に包含する地点のあることが察せられた。この地域は長瀬川の右岸に当り旧河川の流路の痕跡から何回かに亘り氾濫のあったところで、条里制区画もこの付近では乱れている。また穴太神社、杵築神社を中心として中、近世には大集落の存在した古い土地としてもよく知られているところである。

調査

東西約７９m、南北約２６mの土地に５m×５mの試掘孔３ケ所を設け、西からA、B、Cとした。

S・G－A

盛土約1.1mで旧床土に達する。床土は８～１２cm厚みで淡黄褐色土で比較的固くしまっている。つづく２～３層は灰褐色粘質土、灰褐色砂質粘土、灰褐色土、灰茶色砂質土、茶褐色粘質土がかなり複雑に入りこんだ層となって堆積し、南から北方向への傾斜を見せている。これはやはり長瀬川の氾濫との関係を考えてよいように思われる。この層中に含まれる遺物は土師器、須恵器、瓦器などの小片で著しく磨耗している。つづく暗茶色土層は２０～３０cm厚みで比較的安定した層で土質もかなり粘度の高いものである。この層の上面に「合せ口壷棺」が遺存していた。大小２個の壷口を合せ横位置で、ほぼ水平に埋めたものである。２個とも上面は削られ下半が遺っている。この壷棺を埋納した生活層の暗茶褐色土層は上部がかなり削平されている。その後に上層の複雑な堆積があったようである。この堆積は土質や堆積の状態から長籍川の氾濫によるものと察せられる。

壷棺を包含した暗茶色土層の下は約２０cmほどの厚みで安定した自然堆積と推定される微砂層、粘土層が続くものである。

S・G－B

８０cm～１２０cmの盛土の下は南から北方向に僅かに傾斜する床土が置かれている。以下の各層も南に高く北に低い傾きをみせるものである。床土から下の第３、４層はS、G－Aと同様に複雑な堆積となっている。この地点ではS、G－Aに見られた壷棺を包蔵する暗茶褐色土層は遺っておらず、ほぼ完全に失われているようである。遺物はG－Aと同様に磨耗の著しい土師器、須恵器の小破片である。

S・G－C

この地点は盛土が少なく６０～８０cmである。床土下の灰褐色礫混り粗砂層が２０～３０cm厚みで堆積している。この粗砂層は比較的新しい時期の長瀬川の氾濫によるものであろう。砂中に数点の瓦器片

が混入していて穴太神社、杵築神社周辺に旧存した中世集落の遺物のものと推定される。粗砂層から下の各層はG－A、Bと同様に複雑な堆積となっている。この地点でも壷棺を包蔵していた暗茶褐色土層は認められない。遺物もG－A、Bと同様のものである。

まとめ

美園町、宮町および山城町の一部にひろがる佐堂遺跡は上層に鎌倉時代から室町時代の遺物を含む中世遺構の埋蔵が考えられる。しかし深層部についての遺構、遺物のひろがりについては未だ確かな資料は摑めていない。それは旧大和川の一つであった長瀬川右岸の氾濫原の一部に当る地域であること、すなわち幾度かの出水による氾濫が古墳時代を中心とした遺構、遺物を消失させた可能性を考えてよい地域であることである。このことは今回の調査でみられた旧水田床土層から下の約60㎝～1.0mの間に堆積した複雑な土層から推定されるところである。しかしながらG－Aに遺存していた壷棺と暗茶褐色土層のように部分的にかなり良好な状態で遺っている地点もあるところから、今後もこの遺跡は注意されねばならないであろう。

6. 佐堂遺跡

屋内水泳場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

佐堂遺跡は北に弥生時代前期にはじまる山賀遺跡、西は中央環状線を含めた古墳時代前期を中心とした友井東遺跡に接し、古墳時代から鎌倉時代にかけての遺物の出土を見た遺跡である。昭和４９年の大阪文化財センターによる発掘調査では、旧水田面下約3.5ｍに奈良時代の遺物「和同開珍」の出土があり、この遺跡の成立については多くの課題がのこされている。また佐堂遺跡推定範囲の南東に接して穴太集落があり、穴太神社を中心として佐堂遺跡にかけては鎌倉時代の屋瓦片をはじめ各種土器片の散布が認められ、さきの奈良時代遺物包含層との層位的関連は、この遺跡の性格を解明する上での重要課題である。

調　査

美園町２丁目内に予定された屋内水泳場建設予定地は約２ｍ前後の盛土がなされており防護壁を用いない素掘り調査孔では極めて危険であり調査は困難であった。従って調査の主眼を遺物包含層位の確認におき、遺構確認については孔内調査面と断面においた。

1.　ＳＰ－Ａ

盛土部を６ｍ×６ｍで除去し、旧水田面から調査を開始した（3.5ｍ×3.5ｍ）。この調査孔では２時期（第１、２、３、４層）に亘る水田層が認められる。第２、４層の床土中には磨耗の著しい土師器、須恵器、瓦器の細片若干が混入している。第７層は青灰色粘土の部厚い堆積層で土質から推定してかなり長期間に亘る大がかりな水溜りとなった時期を考えることができる。この上の第６層は河川の氾濫（長瀬川期）によると思われる薄い褐色系のシルト質粘土が覆っている。第８層は青灰色の細砂層で遺物の混入は認められないが、ほぼ奈良時代～平安時代層に当るかと推定されるものである。

2.　ＳＰ－Ｂ

上層部においてはＳＰ－Ａとほぼ同様の層序を示すが西寄り、南寄りでは若干土層に乱れが見られる。第５層以下のすべての層には細砂は殆んど見られず、シルト質粘土となり、それぞれに細片ではあるが土師器片、須恵器片、瓦器片が含まれるところから調査地南および西方向に遺物包含層のひろがりを強く感じるものがある。殊に第７、８、１０の３層は褐色系の砂質粘土で比較的硬く、この土質は八尾市内低平地では奈良時代～鎌倉時代にかけての歴史時代層と判断している土質にきわめて近く遺物の包含も他の層に比べて比較的多いようである。すなわち第９層青灰色粘土層上面からは弥生式終末期～古式土師器の時期に当る壷形土器、甕形土器の出土がある。また僅かながら自然植物遺体を含む有機質土の暗黒褐色土層も認められる。層序に乱れはあるが遺構の存在は不明である。

3.　ＳＰ－Ｃ

ＳＰ－Ａの西隣りの調査孔で、Ａと同様に層序はきわめて安定している。ここでも２時期（第１、２、

3、4層）の旧水田層が認められる。第5、6、7の3層については不明であるが、第5層は短期間であるが生活面となった時期があった可能性が土層にみられる。このことはＳＰ－Ｂの第7層と同一面に当り、また他の調査孔でもほぼこれに近い状態を観察することができるところである。遺物は各層に土師器、須恵器、瓦器の細片が若干混入している程度でこれに伴う遺構は認められない。

4. ＳＰ－Ｄ

ＳＰ－Ｂの西に設けた調査孔である。Ｂで推定したことを裏付けるように第6、7層は褐色系の土層で、やはり一時期生活面となった期間を考えてよいものである。第8層上面では口縁部だけとなった須恵器の大甕の出土があり土質も比較的しまりがよい。
調査地南寄りに遺物包含層のひろがりがあるようである。

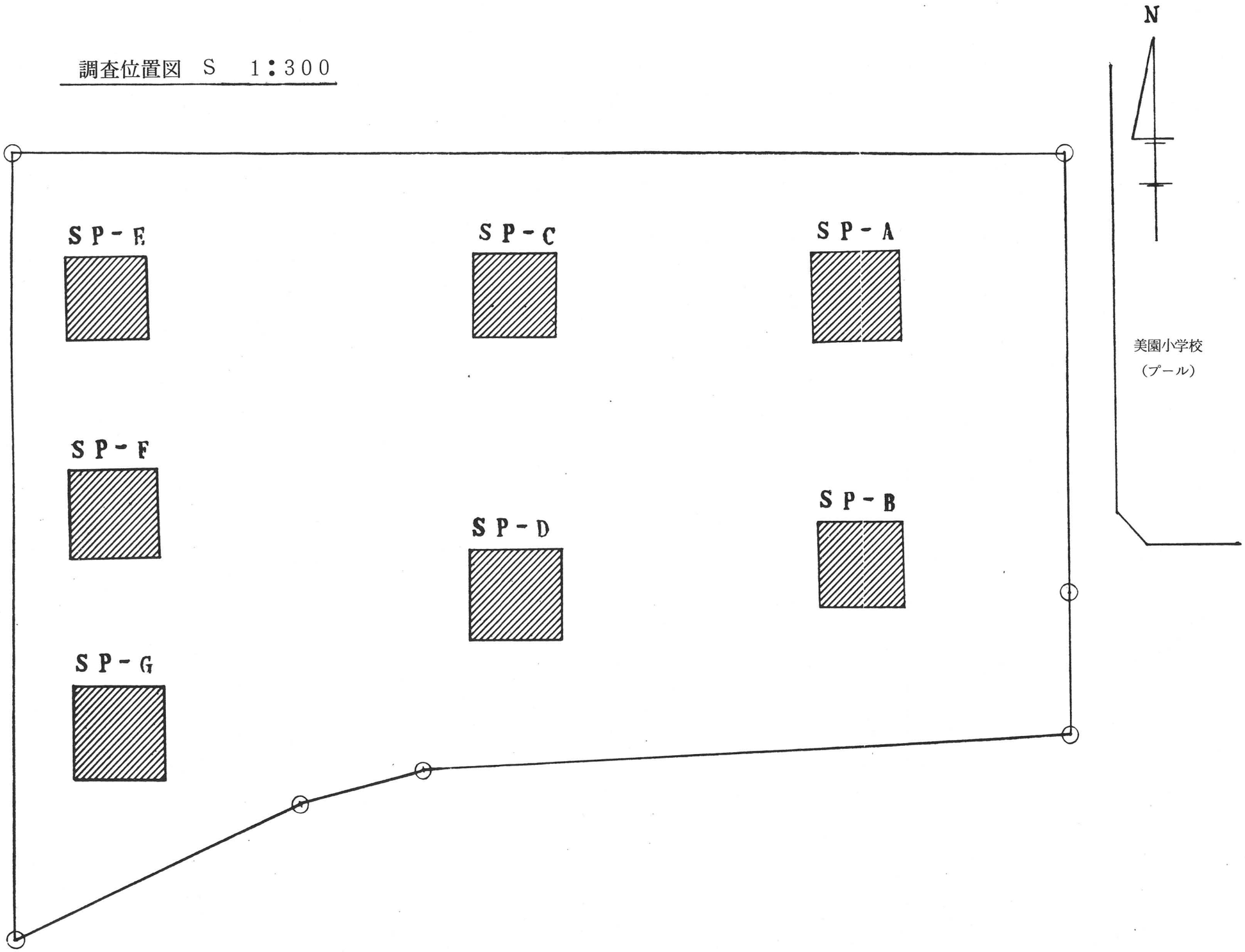
5. ＳＰ－Ｅ

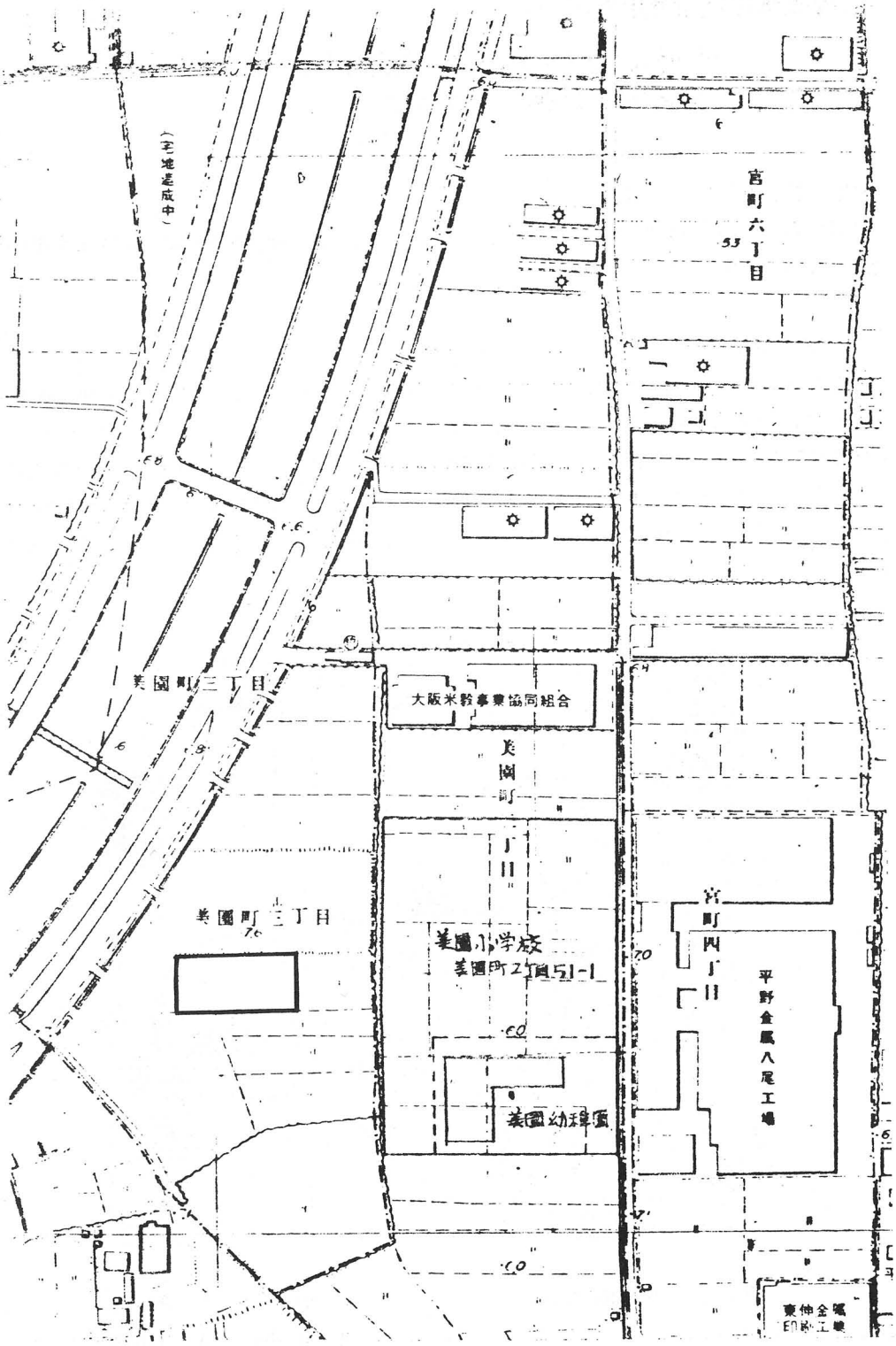
ＳＰ－Ａ、Ｃの東西線上の地点で、層序もＡ、Ｃとほぼ同一である。遺物の混入も磨耗の著しい細片で量もごく少ない。第4～6層までの調査とし以下の層は省略した。

6. ＳＰ－Ｆ

ＳＰ－Ｂ、Ｄに続く南半部の調査孔である関係上深層まで調査を実施した。この地点で特徴的なのは第17、18層の黒灰色ないし暗青灰色粘土層までの各層で細砂、粗砂層の顕著に認められないことである。ＳＰ－Ａ、Ｃ、Ｄにおいては、それぞれ細砂層が1～2層認められ、或時期に小規模ながら氾濫による流砂の堆積を窺わせるがＳＰ－Ｂ、Ｄ、ＦおよびＧにおいては部分的に細砂の堆積は見られるがこの細砂は灰色もしくは青灰色で激しい流勢等による褐色系の砂ではない。観察による推察であるがごく自然に沈澱堆積した状態と判断されるものである。古大和川期の氾濫は概して褐色系の砂の堆積であらわされるのに対し、旧大和川期のそれは比較的粒子のこまかく色調も黒灰色、暗青灰色を呈するらしいことが八尾市東局削遺跡、中田遺跡で確かめられている。すなわち古大和川期において氾濫に対しかなり安定した三角州状堆積台地が各所に形成されていて、この台地上を弥生時代初頭から居住地として選び古墳時代を経て鎌倉時代の頃まで徐々に生活面を上昇させながら集落として継続利用して来たものであろう。第11層からは式土師器（庄内期）の出土があり、第9～12層期を弥生時代終末期から古墳時代の生活面にあててよいようである。これら土器類に伴う遺構は認められないが、ＳＰ－Ｂ、Ｄと同様に南にひろがる遺物包含層、遺構を考えることができる。

調査位置図　S　1：300




(宅地造成中)
宮町六丁目
美國町三丁目
大阪米穀事業協同組合
美國町
丁目
美國町三丁目
美國小学校
美國町2丁目51-1
美國幼稚園
宮町四丁目
平野金属八尾工場
東伸金属印刷工場

7. 中田遺跡〈刑部地区〉

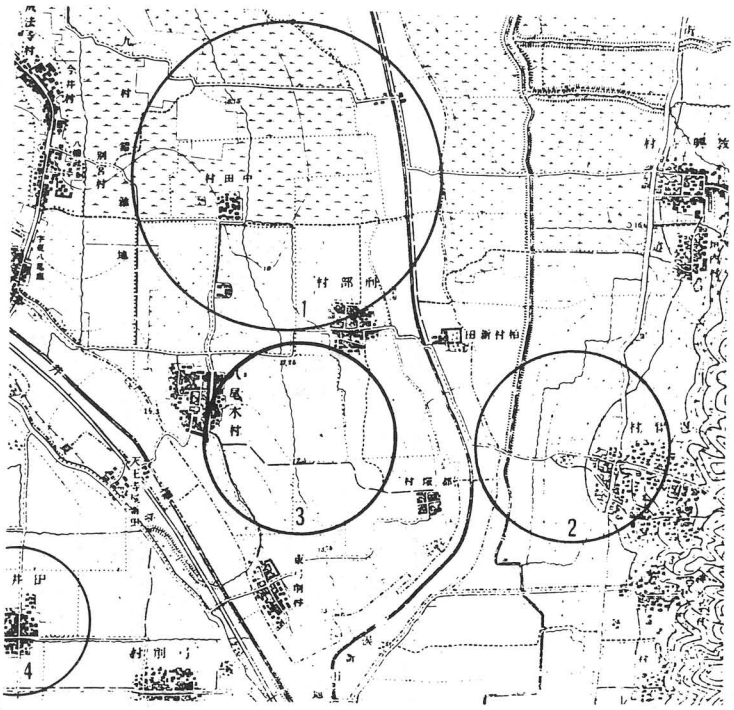
関西電力K.K.地中線埋設工事に伴う
埋蔵文化財調査概要

中田遺跡・刑部地区出土の土器

ここに紹介するのは中田遺跡・刑部地区～八尾木地区で実施された関西電力地下ケーブル埋設に伴う調査で出土した遺物である。

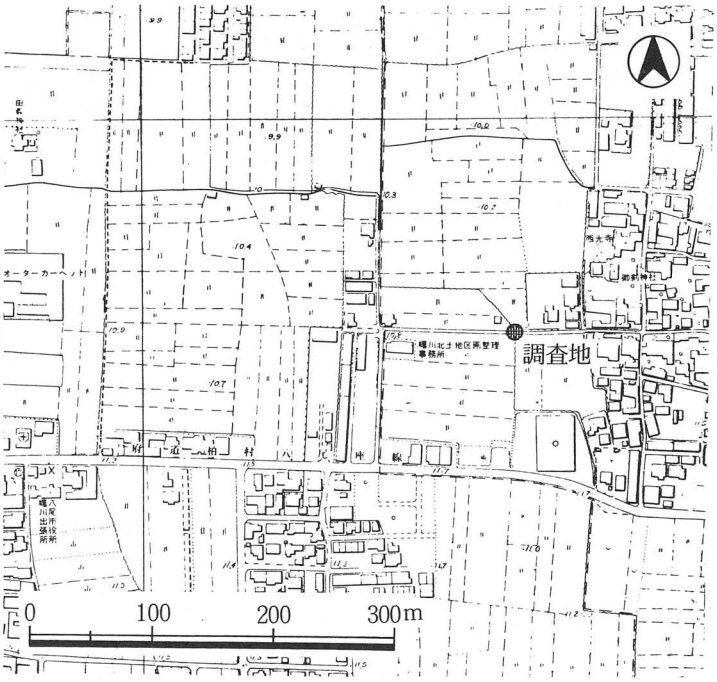
1. 遺跡の位置と環境

中田遺跡は弥生時代後期～室町時代に至る複合遺跡として知られ中田４丁目を中心に東西約1,000 m、南北約900 m[(1)]の範囲をもつ遺跡である。遺跡周辺の歴史的な環境についてみると弥生時代中期～鎌倉時代の遺跡である東弓削遺跡や古墳時代の生活址である小阪合遺跡[(2)]、玉串川を隔てて山麓に縄文時代前期から始まる恩智遺跡等が挙げられる[(3)]。また地理的な占地として旧大和川である玉串川と長瀬川の両河川に挟まれた氾濫原を中心に立地している[(4)]。調査地は行政区画で刑部３丁目に所在し、遺跡の南東部に位置している。



第１図　中田遺跡位置図

1. 中　田　　2. 恩　智
3. 東弓削　　4. 田井中



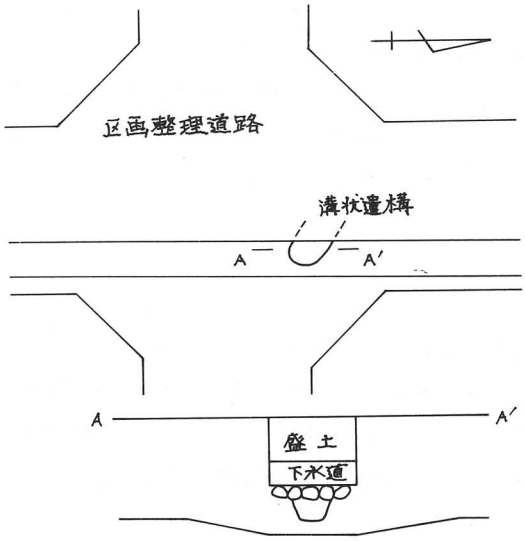
第2回　調査位置図

2. 遺構について

調査は幅約１ｍ、延長約１１２０ｍの工事用掘削溝に実施した。

遺物が出土した場所は区画整理事業に伴って埋設された下水道の下である。

従って遺構を平面的に把えることはできなかった。



第3図　遺構模式図

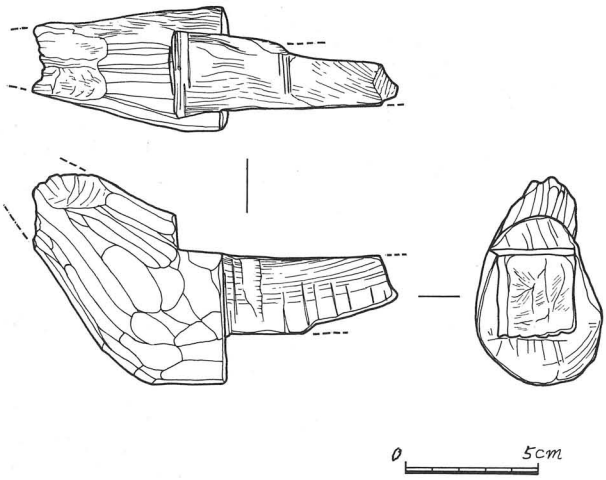
調査は下水道の下を側方から掘る方法で行ない遺物を採集した。遺構は上部を削除されていたが残存幅約１００㎝、残存深さ約５０㎝を測り南東から北西へ延びる溝状遺構と考えられたが詳細は明確にできなかった。

3. 遺物について

遺物は溝状遺構内にすきまなく集積した状態で出土し、一括資料として取扱えるものである。

遺物の種類としては土器、木製品、石器がありこのうち木製品には鳥形木製品がある。土器は鉢形土器、高坏形土器に赤色顔料を塗布したものもみられ祭祀的な要素をもつものが含まれている。

次に土器について概要を記述する。個体別には観察表の記載を参照されたい。



第4図　鳥形木製品実測図

まず土器の総数は約７０個体を数えこのうち図示できたのは６３個体である。器種、数量は甕形土器３６、壷形土器７、底部有孔土器１、椀形土器１、鉢形土器９、高坏形土器９である。

土器には河内産のものと他地域にその系譜をたどれるものが共伴している。数量的には他地域系のものが河内産のものを凌駕している。他地域系の土器のうち大部分は吉備系のものと考えられるが他に産地不明の土器も含まれている。

遺物は一括性の高い状態で発見され各個体間の製作時期はほとんど時間的な幅をもたないものと考えられる。時期的には弥生時代後期末～古墳時代初期に比定でき、既存の型式にあてはめると河内地方の北鳥池下層式～上田町Ⅰ式、吉備地方の編年では才の町Ⅱ式を中心として才の町Ⅰ式の要素をもつもの(11)、下田所式に近いもの(20)などが含まれている。(5)

4. 結　び

現在まで河内で他地域系の土器がこれほど多く一括出土した例を聞かない。これらの資料をどう理解するのかは今後の大きな課題であるが単に他地域系の土器が多量に出土したというだけではなく、その背面にある時代の政治的、社会的な側面からのアプローチが必要であると考える。これらの問題については別の機会に譲るとしてとりあえず資料紹介のむすびとしたい。

（註）

(1) 中田遺跡≪ 北区 ≫発掘調査概要　　中田遺跡調査会

中田遺跡≪ 南区 ≫発掘調査概要　　中田遺跡調査会

中田遺跡調査報告Ⅰ　　１９７４年　　中田遺跡調査センター

中田遺跡調査報告Ⅱ　　１９７５年　　八尾市教育委員会

(2) 八尾市文化財調査報告Ⅲ　　１９７６年　　八尾市教育委員会

(3) 小阪合遺跡について

昭和２７年、府営小阪合住宅建設の際、多量の土師器、須恵器の出土があり、中田遺跡に続く古墳時代の集落跡として知られている。

(4) 大阪文化誌第５号　　１９７６年４月　　（財）大阪文化財センター

八尾市恩智遺跡の出土遺物について

・恩　智　遺　跡　Ⅰ、Ⅱ　　１９８０年　　瓜生堂遺跡調査会

・恩　智　遺　跡　　Ⅲ　　１９８１年　　瓜生堂遺跡調査会　　他

(5) 河内古代遺跡の研究　　１９７０年　　花園高等学校

北鳥池遺跡

大阪府島上高等学校研究紀要　１９６８年

大阪府松原市上田町遺跡の調査

考古学研究第２０巻第４号　　１９７４年　　考古学研究会

古墳出現前夜の集団関係

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　　１９７３年　　岡山県教育委員会

上東遺跡の調査

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告１６　　１９７７年　　岡山県文化財保護協会

川入、上東

種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
甕	1	口縁径（推定） 15.3cm	口縁部、外反屈曲する。調整は内外面に横ナデをおこなうが内面には部分的に刷毛目が観察される。胴部、外面に荒目の叩き、内面はヘラ削りを施す。胴部の最大径部分には煤が付着する。	外面は赤褐色、内面は灰褐色を呈し砂粒を多く含む胎土である。
甕	2	口縁径（推定） 13.7cm	口縁部、外反ぎみに屈曲し内外面ともに横ナデするが内面には刷毛目状の痕跡が残る。胴部、外面に上方から斜め方向、水平方向、最大径部以下は水平方向のあと斜め方向に荒目の叩きを施し、内面はヘラ削りである。外面の器壁には口縁部から胴部の最大径部分まで煤が付着する。	外面は赤褐色、内面は灰褐色を呈し砂粒を多く含む胎土である。
甕	3	口縁径（推定） 15.3cm	口縁部、外反ぎみに屈曲し端部は外側に肥厚する。内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面は荒目の叩きを施し刷毛目を散見する。内面はヘラ削りである。外面の口縁部と胴部の接合部分を中心に煤が付着する。	外面は暗赤褐色、内面は暗灰色を呈し砂粒を多く含む胎土である。
甕	4	口縁径 14.7cm 器　高 19.9cm 底部径 3.6cm	口縁部、外反屈曲し内外面ともに横ナデ、胴部、球状に近い形状で外面の上部には斜め方向、最大径部以下は水平方向に荒目の叩きを施し、下部はナデをおこなう。内面上部はヘラナデであり下半にはコゲ付きがみられる。底部、ドーナツ状を呈する。外面の底部よりやや上方から口縁部にかけて煤の付着が著しい。	褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	5	底部径 4.1cm	ドーナツ状の底部である。外面に荒目の叩き、内面にはコゲ付きがみられる。	外面は褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	6	口縁径（推定） 16.2cm	口縁部、外反屈曲し端部は外側下方に肥厚する。端部側面は平坦な面をもつ、内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面は斜め方向に荒目の叩きを施し内面はナデである。	外面は淡白褐色、内面は淡赤褐色を呈し精良な粘土を使用する。
甕	7	口縁径 15.6cm	口縁部、強いナデによって段状に屈曲する。口縁部内外面に横ナデを施す。胴部、長胴	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

種類	図版番号	法量	特徴	備考
		器高 2 2.8cm 底部径 4.9cm	で肩の張る形状である。外面の上半に右上がりの叩きのあと肩部に横ナデを施しそれ以下は左上がりの叩きで叩きは荒目の叩きで底部にも施す。内面の上半に水平方向のヘラ削りのあと上部はナデを施しそれ以下は下から上へのヘラ削りと思われる。胴部下方から上方と口縁部の外面に煤が付着し、内面底部を中心にコゲ付きが観察される。	
甕	8	口縁径（推定） 1 3.6cm 底部径 2.2cm	口縁部、わずかに外反し、端部は若干尖りぎみに丸く終わる。内外面ともに横ナデ。胴部、外面は比較的細目の叩きを施し内面はヘラ削りである。底部小さな平底を残し叩きのあと散状に刷毛を施す。内面はナデである。器壁は薄手で、底部よりやや上方及び胴部上方、口縁部の外面に煤が付着する。	褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	9	口縁径（推定） 1 7.3cm	口縁部、端部をつまみ上げ端部側面はナデによって凹になる。調整は内外面ともに横ナデ。胴部内面はヘラ削りを施す。外面の口縁部から胴部にかけて煤が付着する。	内面は淡褐白色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	10	口縁径（推定） 1 7.3cm	口縁部、端部は上下方に拡張し、端部側面はナデによって凹になる。調整は内外面ともに横ナデ。胴部内面はヘラ削りを施す。外面の口縁部から胴部にかけて煤が付着する。	内面は淡茶褐色を呈し細砂粒を含む胎土である。
甕	11	口縁径 1 3.6cm	口縁部、屈曲し端部は上下方へ張出す。調整は内外面ともに横ナデを施し端部側面にヘラ描沈線が観察される。胴部、肩の張る長胴形の形状を呈すると思われる。肩部外面は横ナデを施し、以下は下から上へのヘラ磨きである。口縁部と胴部との接合部内面はナデを施し肩部内面は水平方向のヘラ削りである。胴部から口縁部にかけての外面に著しく煤が付着し、胴部内面にコゲ付	淡褐色を呈し微砂粒を含む胎土である。

種類	図版番号	法量	特徴	備考
			きがみられる。	
甕	12	口縁径 16.3cm 器高 24.7cm 底部径 4.9cm	口縁部、屈曲し端部は内傾して上方へ張出す。調整は内外面ともに横ナデし端部側面にヘラ描沈線が観察される。胴部、肩の張る長胴形の形状を呈する。肩部外面は横ナデを施し、以下は刷毛のあと縦方向のヘラ磨きである。口縁部と胴部との接合部内面はナデを施し、肩部内面は水平方向のヘラ削り、それ以下は下から上へのヘラ削りである。底部より肩部にかけての外面に煤が付着し、内面の底部付近を中心にコゲ付きがみられる。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	13	口縁径 13.0cm 器高 20.5cm 底部径 1.7cm	口縁部、外折し端部は上方へ立つ、端部側面の中央に若干凸になる部分があり調整は内外面ともに横ナデである。胴部、球形に近い形状を呈する。肩部外面は刷毛のあと横ナデ、以下は刷毛を施す。口縁部と胴部との接合部内面はナデを施し、内面上半は水平方向のヘラ削り、下半は下から上へのヘラ削りである。底部はわずかに平底を残すがほとんど丸底に近い。口縁部、底部よりやや上方から肩部にかけての外面に煤の付着が著しい。胴部、内面下半に若干のコゲ付きがみられる。	淡茶褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	14	口縁径 16.1cm 器高 20.1cm 底部径 4.4cm	口縁部、屈曲し端部は上方へ張出す。端部側面は横ナデによって凹になる。調整は内外面ともに横ナデである。胴部、最大径がやや上位に位置する形状である。外面は刷毛のあとヘラ磨きを施す。ヘラ磨きは全体にやや斜め方向に施されるヘラ磨きである。内面は斜め方向にヘラ削りを施す。口縁部、底部から肩部にかけて煤が付着し胴部下半に若干のコゲ付きがみられる。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	15	口縁径（推定） 15.8cm	口縁部、外折し端部は上へ張出す。内外面とも横ナデである。胴部、内外面ともに刷	淡茶褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
			毛が施される。	
甕	１６	口縁径 １０.５cm	口縁部、外折し端部は上方に張出す。端部側面は横ナデによって凹になる。調整は内外面とも横ナデである。胴部、外面は叩きのあと部分的にヘラ削りを施す。内面はヘラ削りである。	淡褐色を呈し砂粒の多い胎土である。
甕	１７	口縁径（推定） １０.５cm	口縁部、外折し端部は上方に立つ。端部側面は横ナデによって若干凹になる。胴部、外面は刷毛のあとヘラ磨き、内面は刷毛を施す。胴部中位外面に煤が付着する。	乳褐色を呈し精良な粘土を使用する。
甕	１８	口縁径（推定） １４.４cm 器　高 ２４.６cm 底部径 ３.８cm	口縁部、外折し端部は平担ぎみに終わる。調整は内外面ともに横ナデである。胴部、長胴形を呈する。外面は底部から上部へ刷毛、内面は刷毛のあと下から上へナデを施す。胴部下位よりやや上方から口縁部にかけての外面に煤が付着する。内面下位、肩部にコゲ付きが観察される。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	１９	口縁径 １２.８cm	口縁部、外折し端部は平担ぎみに丸く終わる。調整は内外面ともに横ナデである。胴部、長胴形を呈する。外面は全体に刷毛を施し、内面は上部を水平方向のヘラ削り、以下は斜め方向のヘラ削り、下から上へのヘラ削りである。外面の口縁部、胴部全体に煤が付着し特に胴部中位に著しい。内面下位にコゲ付きが観察される。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	２０	口縁径（推定） １３.２cm	口縁部、外反ぎみに屈曲し端部は平担ぎみに丸く終わる。調整は内外面ともに横ナデである。胴部、長胴形を呈する。肩部外面は横ナデ、以下は全体に刷毛を施す。内面は斜め方向にヘラ削りを施す。胴部下位より肩部、口縁端部付近にかけての外面に煤が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	２１	口縁径 １４.５cm	口縁部、屈曲外反し内外面とも横ナデを施す。胴部、比較的肩の張る形状である。外	淡褐色を呈し部分的に淡赤褐色の色調で

種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
			面下位に叩きが残り全体に刷毛を施す。内面は口縁部との接合部分より下に水平方向のヘラ削り、以下は斜め方向のヘラ削りである。外面の胴部、口縁部に煤が付着する。	砂粒を含む胎土である。
甕	22	口縁部 14.6cm 器　高（推定） 17.6cm 底部径（推定） 3.8cm	口縁部、外折し内外面ともに横ナデを施す。胴部、球形に近い形状を呈し、肩部外面は横ナデ、底部から肩部にかけて刷毛を施す。内面上半は斜め方向ヘラ削り、下半は下から上へのヘラ削りを施す。口縁部、底部より肩部にかけての外面に煤が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	23	口縁径 14.4cm	口縁部、外折し内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面の調整は摩耗を受け調整は不明瞭である。内面上半は水平方向のヘラ削り、下半は下から上へのヘラ削りである。胴部外面の下半に煤の付着が観察される。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	24	口縁径 12.0cm 器　高 16.2cm 底部径 3.1cm	口縁部、外折し端部は方形ぎみに終わる。外面器表は全体に摩耗を受け不明瞭であるが口縁部内外面は横ナデ、胴部、比較的肩の張る形状を呈し、外面はナデを施すと思われる。内面の上半は斜め方向のヘラ削り、下半は下から上へのヘラ削りである。全体に粗雑なつくりである。胴部外面に部分的に煤が付着している。	淡褐色を呈し底部下面は淡赤褐色である。砂粒を含む胎土である。
甕	25	口縁径 14.5cm 器　高 18.3cm 底部径 4.9cm	口縁部、外折し端部は尖りぎみに終わる。調整は内外面ともに横ナデ、胴部、肩の張る形状を呈する。外面最大径部分以下に火気を受け器壁の剥離が著しい。外面で器壁が遺存する部分には荒目の叩きが観察され、肩部外面の一部に刷毛を施す。胴部内面の上半には水平方向のヘラ削りのあと全体に水平方向の刷毛、下半は下から上へのヘラ削りのあと縦方向に刷毛を施す。口縁部、底部から肩部にかけての外面に煤が付着している。	淡褐色の色調でわずかに赤みを帯び、砂粒を含む胎土である。焼成は堅緻である。

種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
甕	26	口縁径 15.4cm 器　高 20.6cm 底部径 2.3cm	口縁部、屈曲外反し端部は尖がりぎみに終わる。調整は口縁部内面に刷毛のあと横ナデ、外面は横ナデを施す。胴部、歪んだ形状を呈し、外面上半に荒目の叩き、底部から胴部最大径部分にかけて刷毛を施す。胴部内面はヘラ削りのあと全体を平滑にする。底部はやや凹である。口縁部、底部よりやや上方から胴部最大径部分にかけての外面に煤が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。焼成は堅緻である。
甕	27	口縁径（推定） 14.2cm 器　高 18.2cm 底部径（推定） 4.7cm	口縁部、大きく外折する。調整は内外面ともに横ナデを施す。胴部、比較的肩の張る形状で外面の肩部付近は横ナデを施し底部から肩部にかけて刷毛目を観察する。内面胴部上半は斜め方向のヘラ削り、下半はほぼ下から上へのヘラ削りである。底部は平底を呈し外面の胴部下半および肩部に煤が付着している。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	28	口縁径 15.2cm	口縁部、外折し端部は丸く終わる。調整は内外面ともに横ナデを施す。胴部外面に下から上へ刷毛を施し、内面は上半を斜め方向のヘラ削り、下部にほぼ下から上へのヘラ削りをおこなう。外面全体に煤の付着が観察される。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。焼成は堅緻である。
甕	29	口縁径（推定） 14.0cm	口縁部、屈曲外反し端部は丸く終わる。調整は内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面を刷毛、内面は上方に水平方向のヘラ削りを施し、胴部外面の一部に煤の付着が観察される。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。焼成は堅緻である。
甕	30	口縁径（推定） 13.8cm	口縁部、屈曲外反し端部は丸く終わる。調整は内外面ともに横ナデ、肩部外面は横ナデ、内面はヘラ削りを施す。	淡赤褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	31	口縁径（推定） 12.0cm	口縁部、屈曲外反し端部側面に平坦面をもつ。調整は内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面は横ナデ、内面はヘラによるナデ	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
			と思われる。	
甕	32	口縁径（推定） 12.0cm	口縁部、屈曲外反し端部は尖がりぎみに終わる。調整は内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面はヘラ削りのあと刷毛目状の痕跡を残すナデ、内面はヘラ削りを施す。肩部外面には上下二列で刺突文を交互に施す。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	33	口縁径（推定） 11.0cm	口縁部、屈曲外反し内外面にナデを施し外面に指圧が残る。胴部、外面はナデ、内面はヘラ削を施す。粗製土器である。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	34	口縁径（推定） 10.8cm	口縁部、屈曲外反し内外面ともに横ナデを施す。胴部、外面は刷毛、内面はヘラナデである。口縁部と胴部の接合部内面はナデによって平滑にする。	外面は淡褐色、内面は淡赤褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	35	口縁径（推定） 11.2cm	口縁部、外折し端部は平担面を有する。調整は内外面ともに横ナデ、胴部、外面は荒目の叩き、内面はナデを施す。胴部外面、口縁部外面には煤が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
甕	36	口縁径 15.6cm 器　高 23.2cm 底部径 3.3cm	口縁部、外折し端部側面は凹になる。調整は内外面ともに横ナデ。胴部、外面は刷毛を施し肩部外面は横ナデである。内面は上半を水平方向のヘラ削り、下半は下から上へヘラ削りを施す。底部は小さな平底でほとんど丸壷に近い。煤の付着は無い。	淡赤褐色を呈し粗砂粒を多く含む胎土である。
壷	37	口縁径 14.6cm 器　高 19.6cm 底部径 2.1cm	口縁部、扁球形の胴部からやや外側へ立つ口縁部はその中途で屈曲し外反する。口縁部内面上方に水平方向のヘラ磨き、外面の頸部付近にヘラ削りが観察される。 胴部、扁球形を呈する。外面は下から上へ斜め方向のヘラ磨き、内面の頸部付近には指圧痕かあるいは紋り跡が残り、内面はナデと思われる。底部は小さな平底でやや凹になる。	淡赤褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

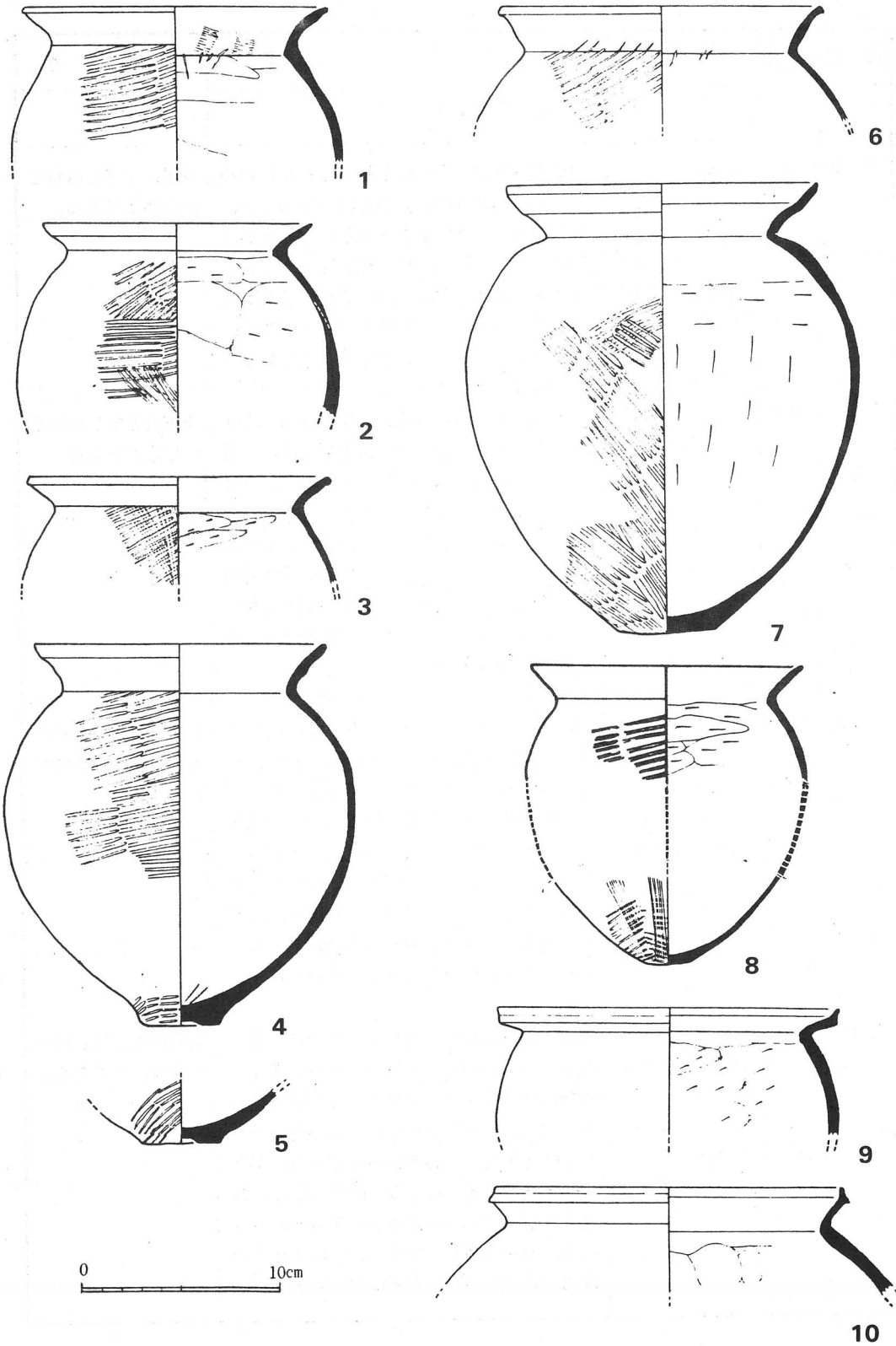
種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
壷	38	口縁径（推定） 16.4cm	口縁部、斜め上方に外反した口縁は中途で屈折しやや外開きに直立する。調整は内面の頸部近くに刷毛、それより上方は水平方向のヘラ磨きを施す。外面の屈折部分以下に水平方向のヘラ磨きを施す。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
壷	39	口縁径 16.5cm	口縁部、頸部は直立し大きく外へ開いたあと端部はさらに上方へ直立する。端部側面の中央は凸になる。調整は頸部内面に刷毛のあとナデ、他はナデを施すと思われ端部側面には刷毛目状の痕跡を残すナデが顕著である。	乳褐色を呈しわずかに砂粒を含む胎土である。
壷	40	底部径 7.0cm	胴部外面は下半を下から上へ刷毛、上半は水平方向の刷毛のあと底部から上方へヘラ磨きを施す。底部は平底でヘラ磨きをおこなう。胴部内面の上半に水平方向のヘラ削、下半は斜め方向のヘラ削りを施し底部を中心にヘラナデを施す。底部は平底を呈する。	外面は淡褐色でやや赤味を帯びる。内面は淡褐灰色で砂粒を含む胎土である。
壷	41	口縁径 15.0cm 器　高 23.9cm 底部径 5.4cm	口縁部、内傾した頸部から大きく外へ開いたあと端部はさらに上方へ直立する。端部側面は横ナデによる3本の凹線状の文様が巡る。口縁の平坦部の内面にヘラ磨きを施し頸部外面に刷毛、内面はナデである。胴部との接合部分外面に刺突文を巡らす。胴部、肩の張る形状を呈し外面に刷毛のあと底部から上方へヘラ磨き、内面はヘラ削りを施す。底部はやや凸になる。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
小型壷	42	口縁径 8.6cm 器　高 7.5cm 底部径 2.4cm	口縁部、外反ぎみに屈折し、内面に水平方向のヘラ磨き、外面は縦方向のヘラ磨きを施す。胴部、内外面とも縦方向のヘラ磨であるが内面上部は部分的に斜め方向のヘラ磨きを施す。 底部は平底である。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
大型壷	43	口縁径 21.2cm	口縁部、やや外開きぎみに直立する頸部から斜め上方に外折して端部は上下方に拡張する。端部側面は凹になる。調整は内外面	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

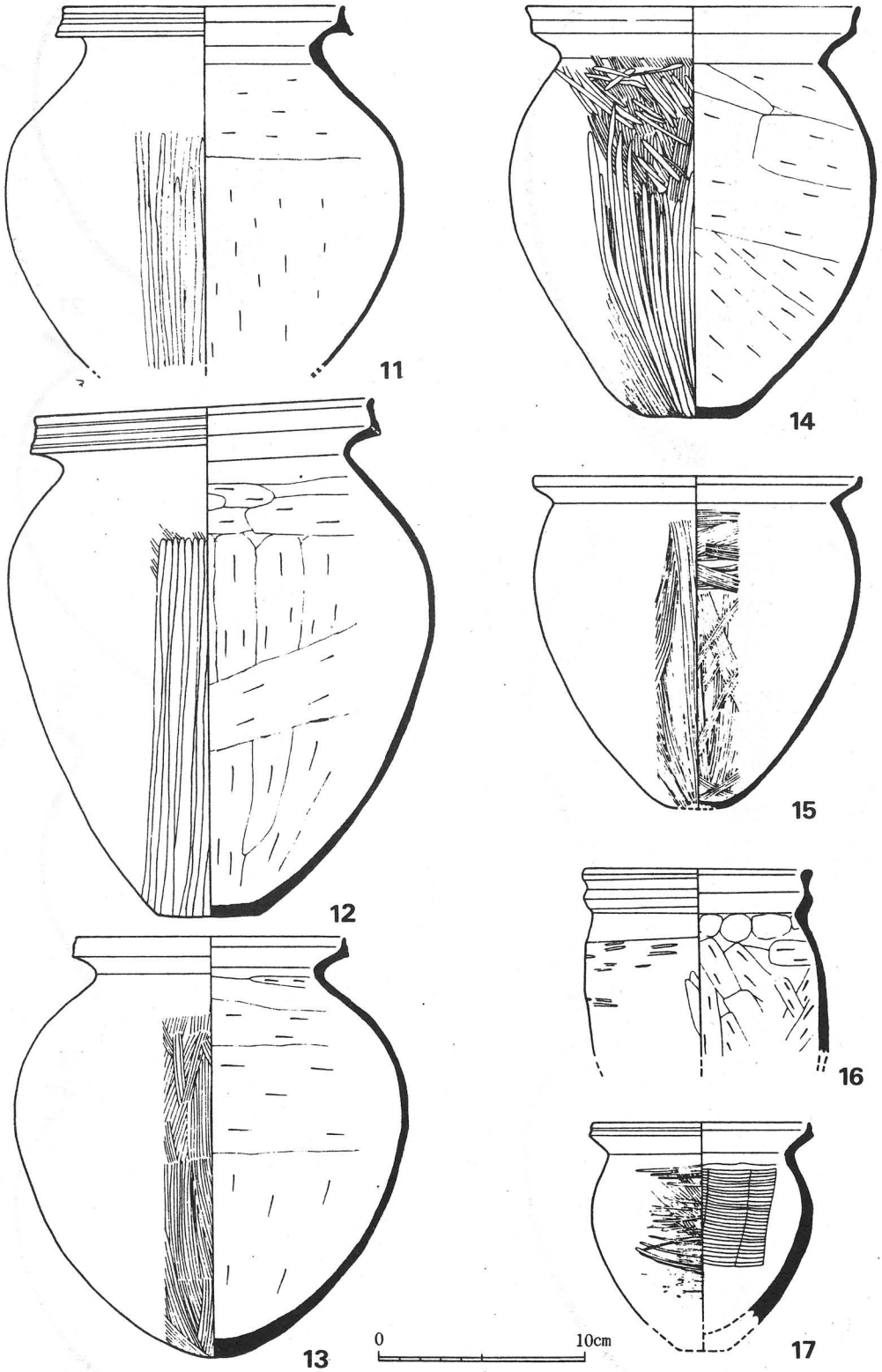
種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
		器　高 4 4.7 cm 底部径 7.3 cm	ともにナデで胴部との接合部分外面に刷毛を施す。胴部、球形を呈し外面全体を叩きのあと刷毛とヘラ磨きを併用し内面は刷毛目が観察される。底部はやや凸ぎみの平底である。	
底　部 有　孔 土　器	4 4	底部径 2.0 cm	底部、焼成前に穿孔を行ない平底である。外面に指圧痕が観察される。	外面は淡褐色、内面は淡黒灰色を呈し砂粒を含む胎土である。
椀	4 5	口縁径 1 4.7 cm 器　高 8.1 cm 底部径 4.9 cm	口縁部、内外面ともに横ナデを施す。体部、外面は粗雑なナデ、内面底部付近にはヘラ押圧がみられ全体に刷毛のあとナデを施す。底部は平底でヘラ削りを行なう。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
小型鉢	4 6	口縁径 1 2.6 cm 器　高 8.9 cm 底部径 3.9 cm	体部、内彎ぎみに上方へのびる。調整は内外面ともにナデであり内面は刷毛目状の痕跡を残すナデである。底部は高台状の底部で凹底である。体部との接合部の外面に指圧痕が観察される。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
小型鉢	4 7	口縁径（推定） 1 0.3 cm 器　高 7.3 cm 底部径（推定） 4.0 cm	口縁部、外折し端部は上方へ立つ。端部側面はヘラで押圧し凹になる。調整は外面をナデ、内面にヘラ磨きを施す。胴部、外面は刷毛のあとヘラ磨き、内面の上部に刷毛が観察される。底部は平底である。	乳褐色を呈し精良な粘土を使用する。
小型鉢	4 8	口縁径 1 4.2 cm 器　高 5.5 cm 底部径 3.0 cm	体部は平底の底部から内彎ぎみに上方へのびる。調整は外面に底部から上方へ刷毛、内面は斜め方向に刷毛を施す。	淡茶褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
小型鉢	4 9	口縁径（推定） 1 3.4 cm	口縁部、体部より屈折し直立する口縁である。調整は内外面ともに横ナデを施し、外	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

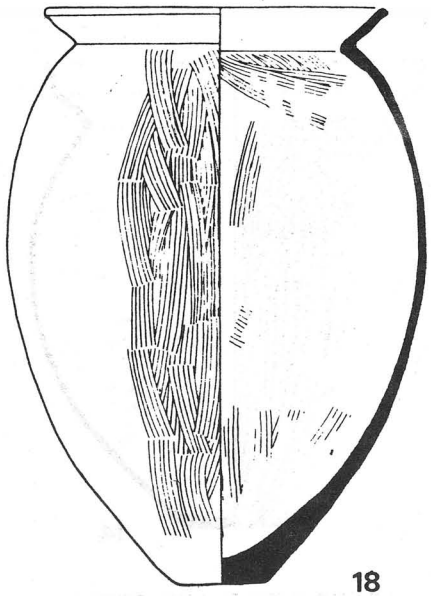
種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
		器　高 5.3cm 底部径 1.8cm	面の体部との境は凸になる。体部、やや内彎し外面にヘラナデ、内面はヘラ磨きを施す。底部は凹になる。	
小型鉢	50	口縁径（推定） 14.6cm 器　高 6.5cm 底部径 2.0cm	口縁部、外折し端部は上方へ立ち端部側面は凹になる。調整は内外ともに横ナデ。体部、内面に刷毛、底部付近はナデ、外面はヘラナデを施す。底部は小さな平底をつくる。体部の外面に煤が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
鉢	51	口縁径（推定） 27.0cm	口縁部、斜め上方に外折し端部は上方へ立つ。調整は内外面ともに横ナデを施し端部側面は凹になる。体部、内面の上部は刷毛目が観察され、下部には刷毛目状の痕跡を残すナデを施すと思われる。外面は上部に刷毛、下部にはナデを施す。体部の内面には部分的に赤色顔料が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
鉢	52	口縁径 32.5cm 器　高（推定） 18.2cm 底部径 8.8cm	口縁部、外折し端部は外側上方へ立つ。調整は内面にヘラ磨き、外面はナデを施す。体部、外面に刷毛のあとヘラ磨き、内面はヘラ削りを施し、上部に刷毛のあと全体にヘラ磨きを施す。口縁部、体部外面の一部には煤が付着し、体部内面にはコゲ付きが観察される。底部は平底である。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
鉢	53	口縁径 20.2cm 器　高 14.0cm 底部径 7.9cm	口縁部、屈折外反し端部の外側に平担面をつくる。調整は内外面ともに横ナデ、体部、内外面にヘラ削りのあと刷毛を施す。器壁全体に赤色顔料を塗布する。底部は平底である。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
鉢	54	口縁径（推定） 24.5cm	口縁部、屈折外反し内外面に横ナデを施す。体部、内外面に刷毛のあとヘラ磨きを施す。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
高　坏	55	口縁径	口縁部、内彎する坏部から外反し端部を外	淡褐色を呈し砂粒を

種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
		19.1cm 器　高 11.6cm 脚端径 14.8cm	側へ曲げる。調整は口縁部、坏部の内外面ともにヘラ磨きである。脚部、短い柱状部から大きく外へ開く裾部である。柱状部外面にヘラ削り、裾部外面はヘラ磨きを施す。内面はナデを施し透しは4孔である。	含む胎土である。
高　坏	56	口縁径（推定） 22.2cm 器　高 14.5cm 脚端径（推定） 14.2cm	口縁部、内彎する坏部から外反し端部は丸く終わる。調整は口縁部、坏部の内外面ともにヘラ磨きであるが口縁部外面は摩耗を受けて不明瞭である。脚部、比較的長い柱状部から大きく外へ開く裾部である。内外面ともに摩耗を受けて不明瞭であるが柱状部にはヘラ削りが観察される。坏部内面に赤色顔料が付着する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
高　坏	57	口縁径（推定） 21.9cm 器　高 13.4cm 脚端径 14.3cm	口縁部、坏部から外反し端部は丸く終わる。調整は口縁部、坏部の内外面ともにヘラ磨きである。脚部、比較的長い柱状部から大きく外へ開く裾部である。柱状部外面にヘラ削りのあとヘラ磨き、裾部外面もヘラ磨きを施すが摩耗を受けて不明瞭である。裾部内面にはヘラ押圧が観察され透しは4孔である。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
高　坏	58	口縁径（推定） 21.7cm 器　高 12.5cm 脚端径 13.9cm	口縁部、坏部から外反し尖がりぎみに終わる。調整は口縁部、坏部の内外面ともにヘラ磨きである。脚部、短い柱状部から屈折する裾部は内彎し端部は凹になる。柱状部外面にヘラ削りのあとヘラ磨きである。裾部外面は刷毛のあとヘラ磨き、内面はナデである。透しは4孔と思われる。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
高　坏	59	口縁部（推定） 19.0cm 器　高 11.2cm 脚端径 15.1cm	口縁部、坏部から外反し外面の接合部には段を有する。調整は口縁部、坏部の内外面ともヘラ磨きであるが他に比較して幅広のヘラ磨きである。脚部、短い柱状部から大きく外へ開く裾部である。柱状部外面にヘラ削り、裾部外面はヘラ磨きである。裾部内面は刷毛のあと端部付近を横ナデする。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。

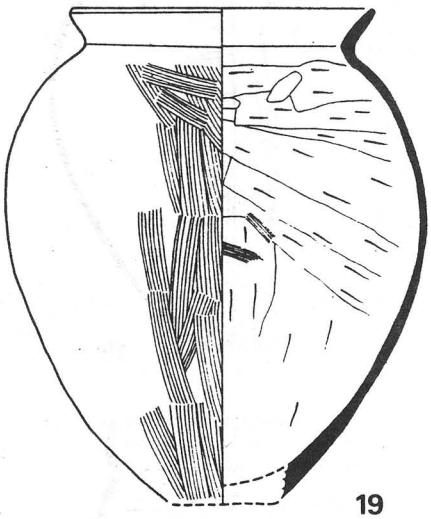
種　類	図版番号	法　　量	特　　徴	備　　考
			透しは4孔である。	
高　坏	60	口縁径 15.2cm 器　高 9.9cm 脚端径（推定） 11.7cm	口縁部、坏部から外反し端部は丸く終わる。口縁部の開きは狭い。調整は口縁部内面、坏部内外面にヘラ磨きを施し口縁部外面はナデである。脚部、短い柱状部から大きく外反する裾部である。柱状部外面にヘラ削りのあとヘラ磨き、裾部外面はヘラ磨き、裾部内面はナデを施し透しは4孔である。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
高　坏	61	口縁径（推定） 17.7cm 器　高 12.1cm 脚端径 13.5cm	口縁部、坏部から外反し端部を外側へ曲げる。口縁部の開きは他に比較して狭い。調整は坏部内面に刷毛のあとヘラ磨き、口縁部内外面、坏部外面にヘラ磨きを施す。脚部、外開きの柱状部からそのまま裾部になる。裾部は内彎している。摩耗を受け不明瞭であるが裾部外面にヘラ磨きが観察される。裾部内面はナデである。坏部内面に赤色顔料を塗布する。	淡褐色を呈し砂粒を含む胎土である。
高　坏	62	口縁径（推定） 18.4cm 器　高 14.7cm 脚端径（推定） 14.3cm	口縁部、受け皿状の坏部から二段に屈折し、端部に刺突文を巡らす。調整は口縁部、坏部の内外面ともにヘラ磨きを施す。脚部、短い柱状部から大きく外へ開く裾部で端部は上下方に拡張させる。柱状部と裾部の接合部外面には刺突文を巡らす。柱状部外面はヘラ削りのあとヘラ磨き、裾部外面は刷毛のあとヘラ磨き、裾部内面は刷毛のあと軽くナデを施す。透しは4孔と思われる。	乳褐色で精良な粘土を使用し砂粒を含む胎土である。
高　坏	63	口縁径（推定） 13.6cm 器　高 9.4cm 脚端径 8.6cm	口縁部、坏部から屈曲外反する短い口縁である。口縁部内面は水平方向にヘラ磨き、外面は摩耗を受け不明瞭であるが縦方向のヘラ磨きを施すと思われる。坏部内外面もヘラ磨きを施す。脚部、坏部との接合部より外へ開いて端部に至る。端部は肥厚し刺突文を巡らす。調整は外面に縦方向のヘラ磨き、内面は刷毛を施す。透しは3孔で口縁部内面以外のヘラ磨きは幅広である。	淡茶褐色を呈し砂粒を含む胎土である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
10cm

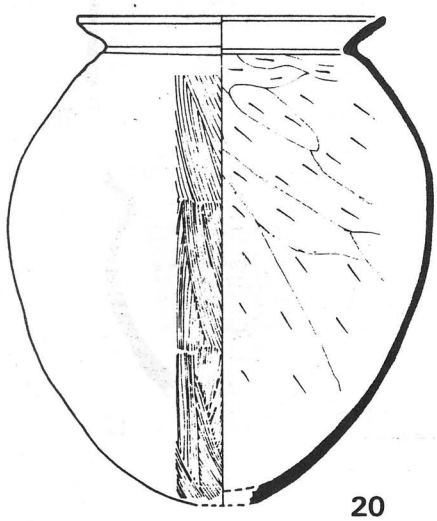

11
12
13
14
15
16
17
0
10cm



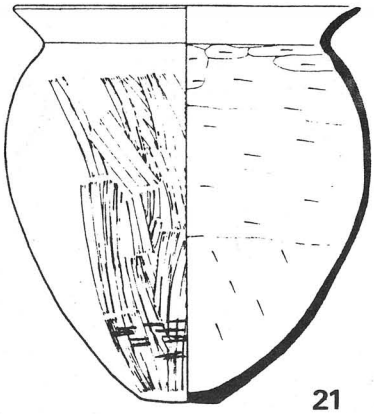
18



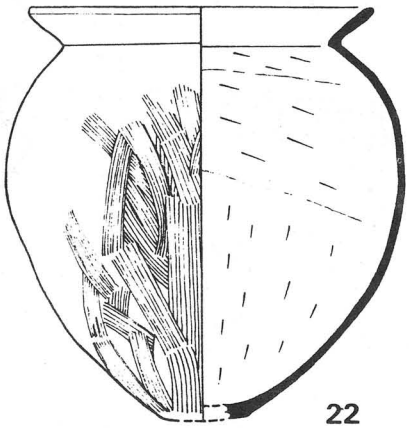
19



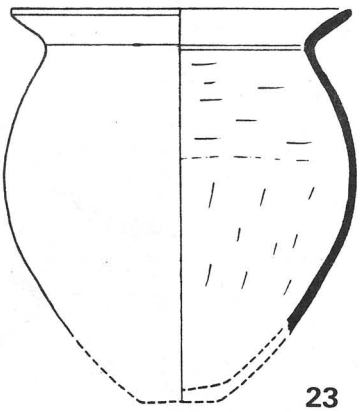
20



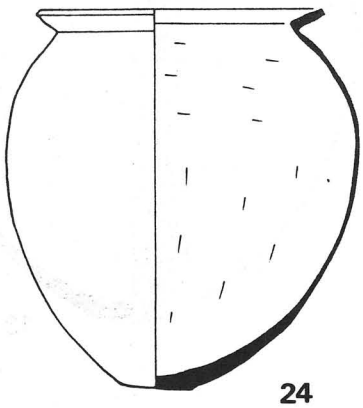
21



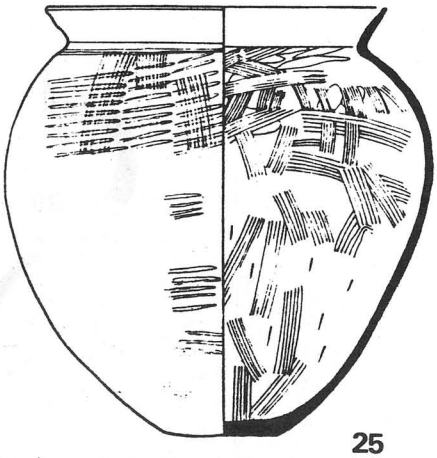
22



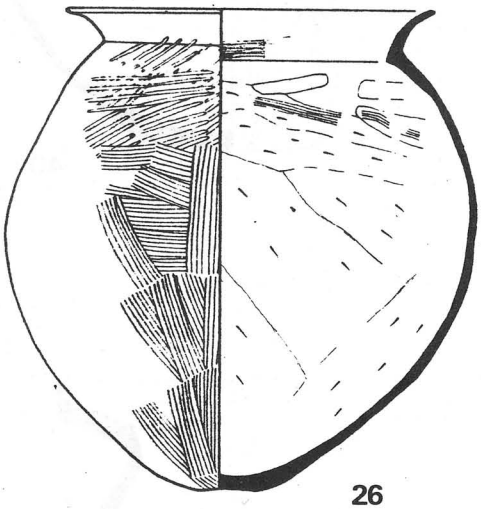
23



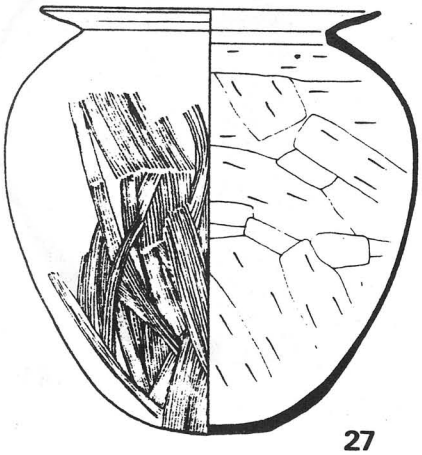
24



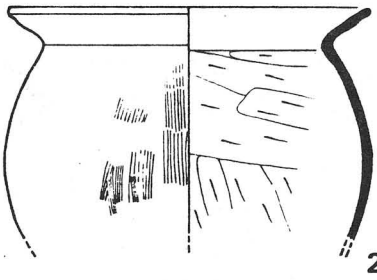
25



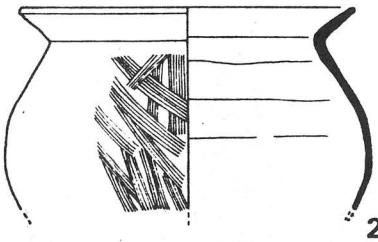
26



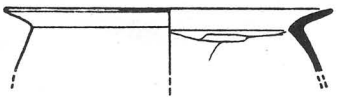
27



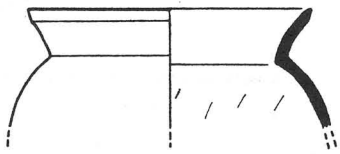
28



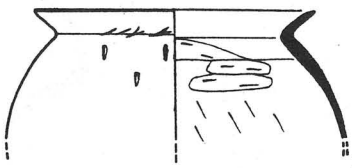
29



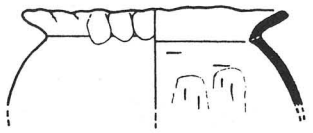
30



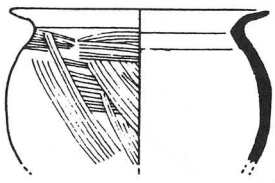
31



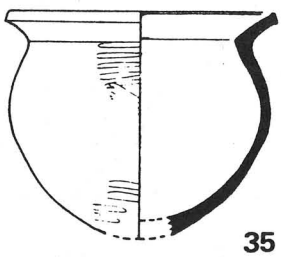
32



33

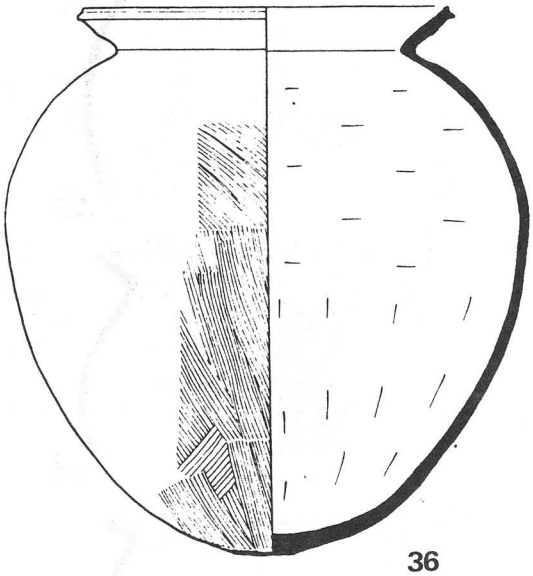


34

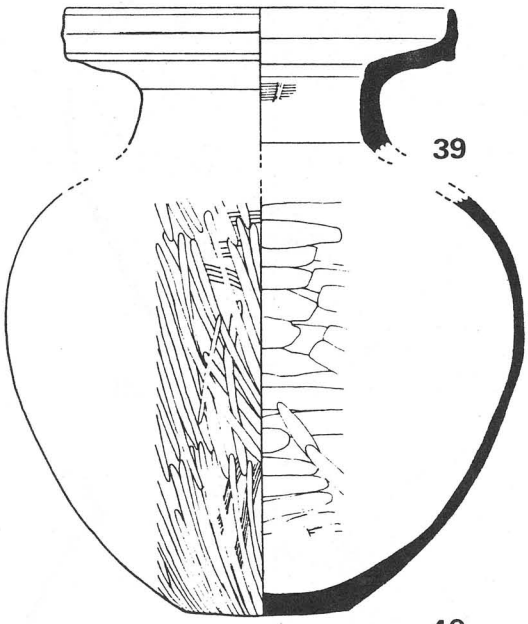


35

0 10cm



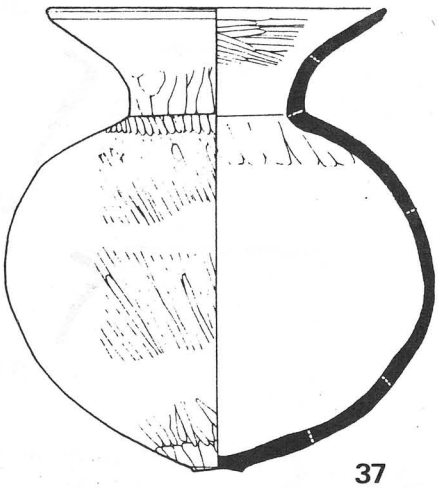
36



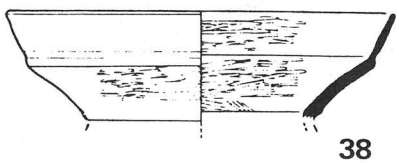
39

40

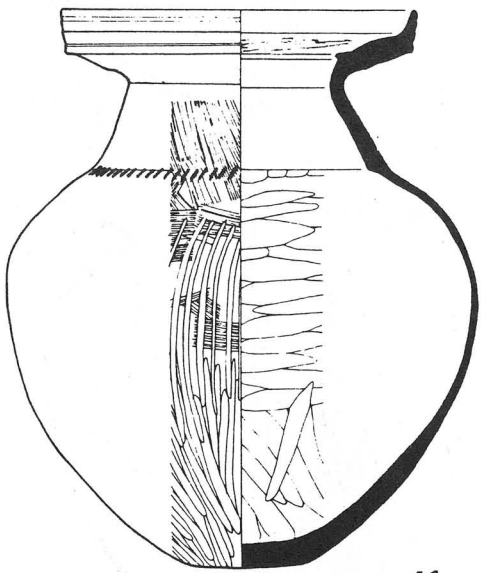
0 10cm



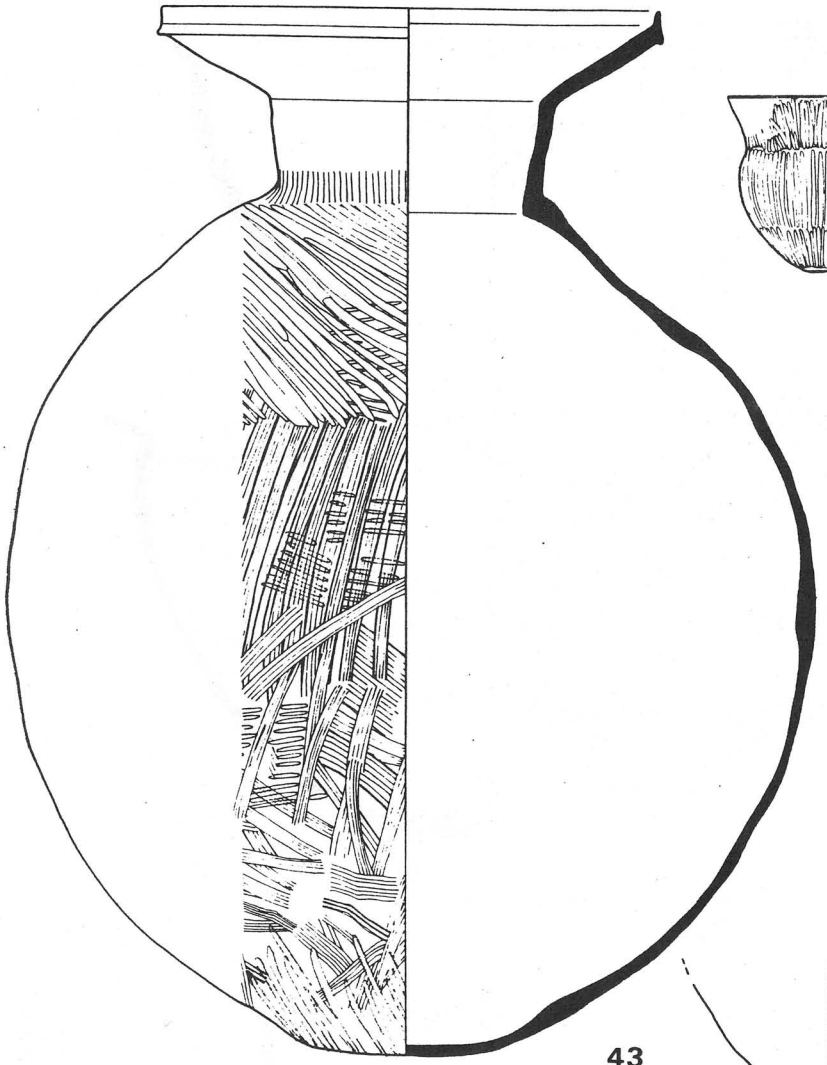
37



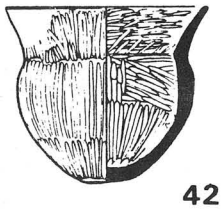
38



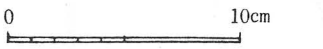
41

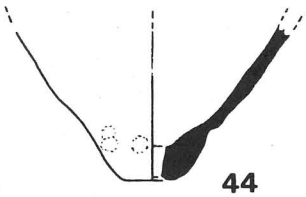


43

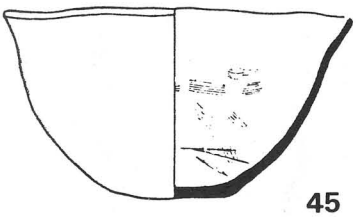


42

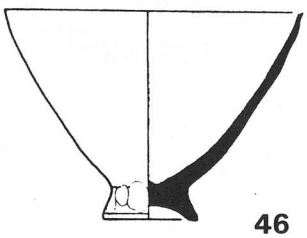




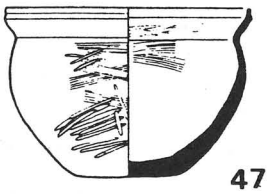
44



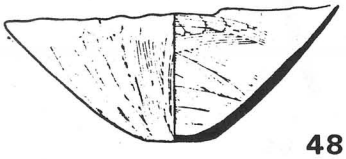
45



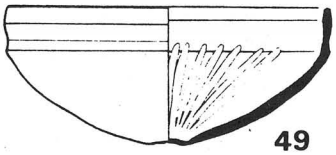
46



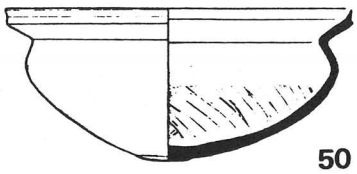
47



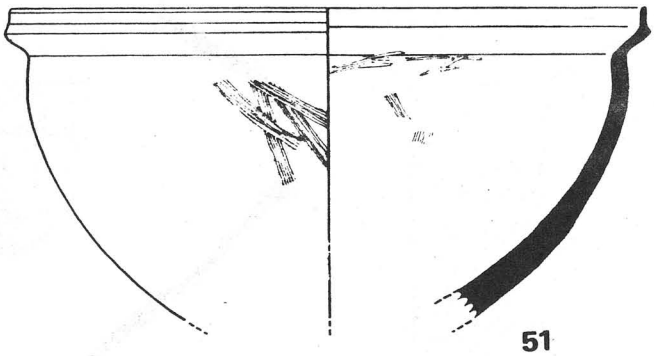
48



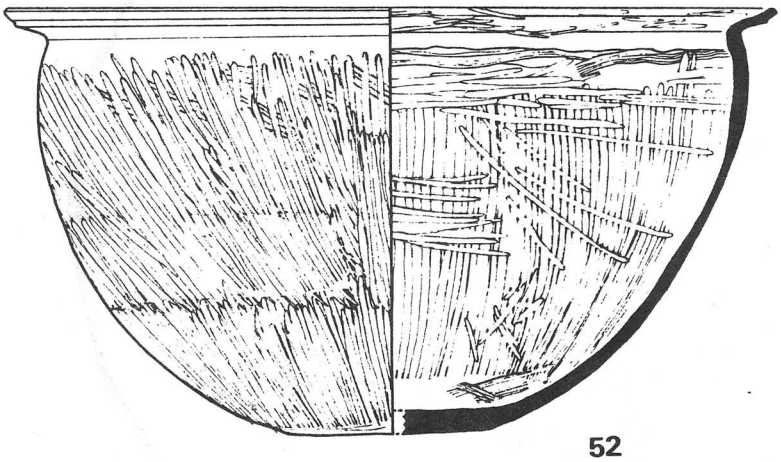
49



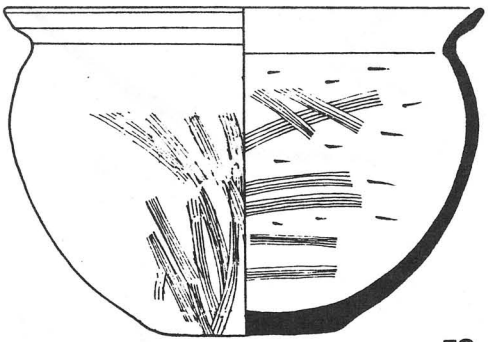
50



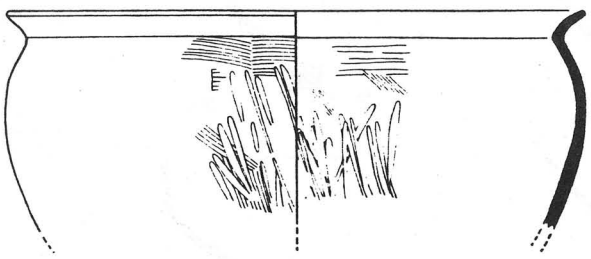
51



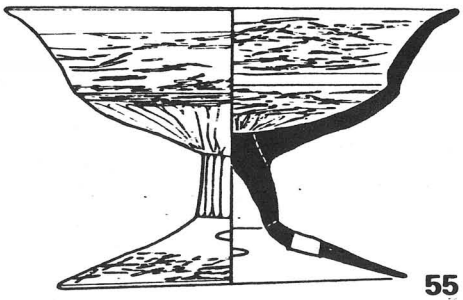
52

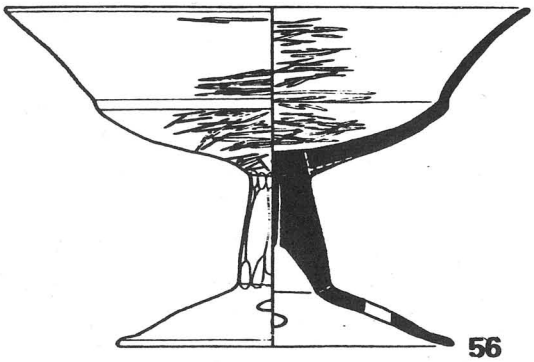


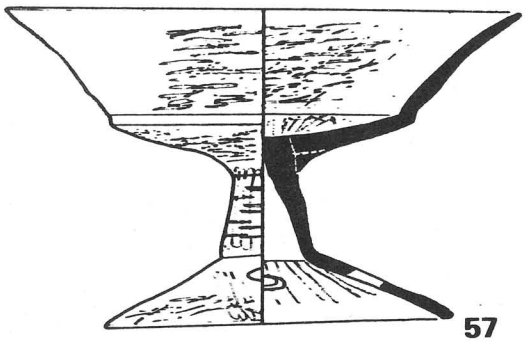
53

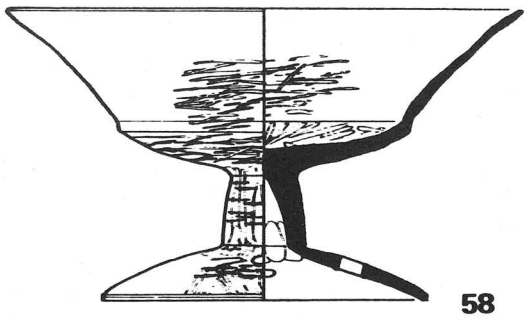


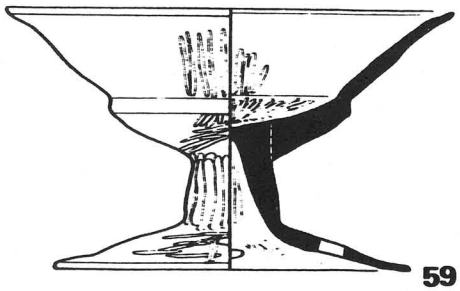
54

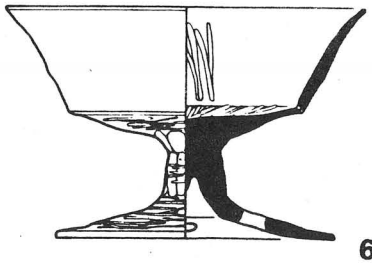

55

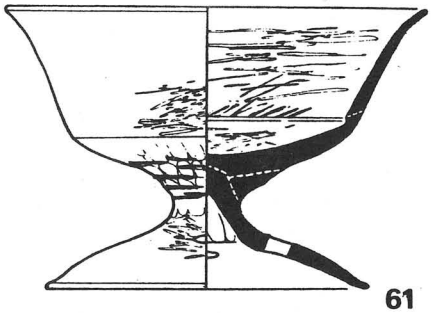

56

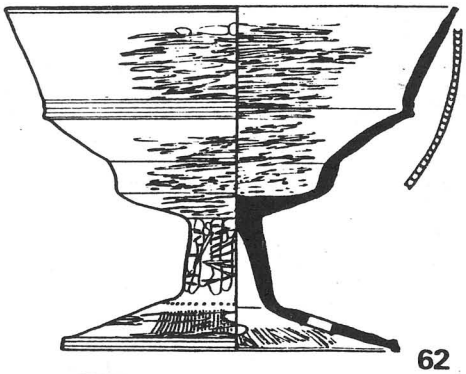

57

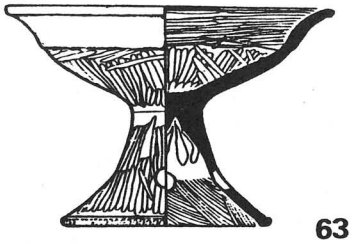

58


59


60


61


62


63